

東京白楊だより

第24号
平成13.9.1
(2001年)



白楊ヶ丘同窓会東京支部

旧制函館中学校
函館中部高等学校

ホームページアドレス <http://www2.hotweb.or.jp/hakuyou/>



函館の朝 佐瀬谷安津雄 (64期)

白楊魂の重み



白楊ヶ丘同窓会東京支部長

杉田 博子

54期(昭和27年卒)

新しい共学制度に変わった昭和二十五年、應立高女から中部高校へ転校して来たが、仲良しの友と離れてしまったものの、多くの友人達と一緒にだったので、楽しい学校になっていくのにもあまり時間がかからなかった。それ迄の「清く正しく美しく」の校訓の中で過して来た学生生活から、一転して事あることに白楊魂を見せられて、何か身の引きしまるものがあった。諸先生の計らいで共学にも馴染み、楽しい学生生活を送る事が出来たのを感謝している。

それから何年か、誘われるままに同窓会の仕事をお手伝いして十数年になるが、年を重ねると共に中部高校が、伝統あるすばらしい学校である事を体験し、先輩の方々が積み重ねて来られたものの大きさを感ずるようになった。同時に中部高校の卒業生であることに誇りを感じている。はからずも、この度同窓会東京支部長という大役を仰せつかい、ますます責任を感じている。

先輩の方々が築かれた伝統ある白楊ヶ丘同窓会、そして白楊魂を皆様のお力添えをいただきながら、守っていききたいと思っています。

本校の将来像は

函館中部高等学校長 宮下 勤



白楊ヶ丘同窓会東京支部の親睦大会にあたり、本校の現状報告を兼ねて、ご挨拶申し上げます。同窓生の皆様には、日頃から本校の教育活動に、ご支援・ご協力を頂きまして、心からお礼を申し上げます。

今年四月に赴任して以来、毎朝出勤時に、函館山をイメージしたといわれる校舎と、白楊ヶ丘のいわれとなるポプラの大樹を想定した四本柱を眺め、函館中部高校の歴史と伝統の重みを感じております。

私は函館生まれですので、臥牛山や巴港などという懐かしい言葉と、海から渡ってくる涼風などに、改めて、故郷に帰ってきたことを実感しています。

今、学校運営は大きな転換期にあると言えます。一つには、平成十四年度からの完全学校週五日制への対応です。休日となる土曜日を学校教育という立場で対応すべきなのか、それとも、社会教育の一環としての対応を考えていくのかが、大きな課題となっています。高校が地域社会との連携を、重視してきたかどっかを問われること

になりそうです。

また、学校の運営に関して地域社会や保護者から幅広く意見を求めるという学校評議員制度も、平成十四年度からスタートします。いずれにしても、大げさなようですが、教育を学校だけで行う時代は終わつたという、そんな意識で学校教育を考える時代がやってまいりました。

高校が設置されている北海道の多くの町が、過疎化の波を高校の存続という視点で乗り切ろうと努めてきました。しかし、少子化は、高校の統廃合だけに止まらず、市町村の合併さえも視野に入れなければならぬ事態となつています。今や、地域社会での学校の存在意識について、総合的な視点で捉え、積極的に新しい学校像を模索することが生き残りをかけた条件なのです。

本校は、今年度入学した一年生から六学級となりました。生徒数の減少は、教育活動に直接的に大きな陰を投げかけるだけに、本校としては大事な局面を迎えたことになりました。しかし、本校の生徒は、部活動にも、勉学にも、大変よく頑張っております。入学辞退者の増加など、多くの課題はありますが、少なくとも現在、白楊魂は健在であると思っております。

「ご函館市では、おそらく近い将来、公立と私立との共存が大きな課題となります。中学校卒業生の減少への対応を、募集定員を減らすこと

いうだけで、解決することに限界が生じてきたからです。しかし、今はまだ、これを取り越える具体的な方策はみえてきません。そのためにも、今、各学校が取り組まなければならないことは、地域社会が学校に何を求めているかを的確に把握、分析し、地域社会が求める学校像を策定することだと思っております。本校が今、緊急に取り組まなければならない課題の一つです。

さて、人間は未来を予測することは出来ませんが、過ぎ去つた過去とは昨日のように思いだし、高校三年間は、いつまでも、何歳になつても、皆さんの心の中で生き続けています。同窓会の原動力はこの思い出にあるといつても過言ではありません。たとえ、年齢や学んだ校舎が違つていても、同じ同窓生というだけで、世代を越え、時を越えて、同じ仲間として認知しあえるのは同窓生だけに与えられた特権なのかもしれません。

私は、本校の創立百周年記念誌「潮流」を読むたびに、多くの同窓生や本校関係者の熱い想いを感じます。今後とも、本校の歴史と伝統を守り、さらに発展させていくため、学校の総力を挙げて、新しい視点での学校づくりを努める覚悟です。

本校が、さらに大きく羽ばたくためにも、どうか、同窓生としての大きな視点で、本校の未来について語ってください。そして、同窓会という大きな輪で、本校を温かく包んでいただきたいと思ひます。

皆さんのますますのご活躍を、心からお祈り申し上げます。

バスケット部創部70周年

函館中部高等学校バスケットボール部OB・OG会

会長 加賀谷幸三

57期(昭和30年卒)

昭和六年(一九三一年)に籠球部が創部されて以来、本年で70周年を迎えることが出来ました。学制改革により校名は変わりましたが、その精神は変わることなく連綿として、引き継がれ伝統を築き上げております。戦後、競技会が復活して、いち早く全道優勝と、全国三位入賞を契機に、その後、幾度かの全国大会出場を果たし、数々の名勝負を残してまいりました。また、女子も男女共学になって数年後、昭和二十七年の入学生は創部三年目で全道優勝して全国大会へ男女一緒の出場を果たしております。

今回、記念の行事を実施しましたのは、今までの経過を大成するとともに、これからも後々伝統を引き継いでくれるであろう後輩の皆さんへの励ましと奮起を期待してのものでもあります。

結びにOB・OGの皆様方には青春の一時、共に流した汗と涙、そして感動を語り合うとともに、現役の生徒諸君が各地の大会に出場出来ました折には、励ましの言葉をかけていただくことをお願い申し上げます。



白楊ヶ丘同窓会東京支部 第24回親睦大会



白楊ヶ丘同窓会各支部から来賓の方々

65期(昭和38年卒) 菅原 大作
副支部長

“心のオアシス東京支部を活力ある集いに”をテーマに、白楊ヶ丘同窓会東京支部の平成12年度「第24回親睦大会」が、10月27日(金)午後5時より、東京・千代田区永田町の「星陵会館」で、来賓及び同窓生など約170人が参加して行われた。

今回の特別企画では、懇親会の前に、放送作家で鍼灸師の片山明子さん(昭和27年・54期卒業)が、「東洋医学に学ぶ心とからだの健康法」と題した講演を行った。

片山さんは、昭和九年、東京生まれ。早稲田大学卒業。日本放送作家協会、日本脚本家連盟、全日本鍼灸学会会員として、ドラマ、ドキュメンタリー、ディスクジョッキー、スタジオ構成などの分野で活躍中。テレビ、ラジオの脚本一万本以上を手掛けるほか、映画、ビデオ、オペラ、舞台構成なども行う。また、合唱団白樺では、54年の入団以来、企画・構成責任者・司会をされている。

85年より、片山明子の鍼灸治療室「パレアナ」の院長として、多くの患者の治療をすると同時に、ヨガ、氣功、呼吸法、瞑想法などの教室を主宰して健康指導をするなど幅広い活動をされている。

現在、ロイヤル・アカデミー・ホメオパシー校でヨーロッパの漢方ともいっべき薬学(ホメオパシー)を勉強中。

講演に先立って、片山さんと同



講演する片山明子さん

期の佐藤正郎氏が「私は戦後、最後の中学生として入学した。当時、函中では鉄拳制裁が横行し、先生も上級生もよく殴った。例えば十二月の寒い日、靴下かズック靴を履いているというだけで、柔弱だと殴られた。下級生が入るのを待っていたが、学制が変わって新制中学の四年間、最下級生として殴らねばならなかった。高校二年生になり、下級生が入って来ると思ったら、またまた学制が変わって男女共学になった。男女共学となると、野蛮な鉄拳制裁はなくなりました。この時天女のように舞い降りてきたのが、片山明子さん。小柄な体に、頭の半分を占める純白のリボンをつけた片山さんに、我々は皆カルチャーショックを受けた。彼女は、持ち前の人懐っこさで、たちまち同期のアイドルになった。

片山さんは、放送作家でプロデューサー。東洋医学の教師。その上、ホメオパシーにも挑戦中。このエネルギーが小柄な体のどこから湧いてくるのか、講演を通じて、彼女のエネルギーの源を汲み取っていただきたい」と、紹介した。

片山さんは、「今からおよそ二十年前の中国の書物、黄帝内経(こうていけい)に、「健康で長寿を保つには自然に逆らわない生活をする」と繰り返して書かれて

いる。副題を「百三十歳まで楽しく元気に生きるために 今この逆転の発想があなたの健康を守る」としたが、百三十歳寿命説には根拠がある。哺乳動物の寿命は「成熟年齢×六」と言われ、人間の男性の足の中指が成熟するのは二十三〜四歳。この六倍、つまり百三十八歳が人間の寿命。一方、文明が進み、自然から遠ざかるほど短命で病気がちになる。自然に逆らわない生き方が健康と長寿を約束するというテーマで話を進めたい」と前置きして講演に入った。

「内なる自然とは、生命力とか生命エネルギー、自然治癒力と言われる。我々の身体は一個の受精卵が細胞分裂を繰り返して、生まれた時には立派な人間の身体となっている。その後も成長し続けるが、これらは内なる自然がすべて統率している。骨折や傷が治るの

をとりながら聞き入る人も





二上達也 前支部長

も自然治癒力。これを我々は忘れがちで、人が始めから持っている「気」も見えないため信じない人が多い。

例えば風邪は、ウイルスで引き起こされるが、ウイルスに効く薬はなく、従って風邪に薬は効かない。しかし、風邪をひいても三、四日で治るのは、体内の免疫力（自然治癒力）が働いてウイルスに対する特定の抗体を作りだすためである。抗体を作りだすために必要なものが体温を上げることである。体温を上げることで白血球がウイルスを貪食したり、殺菌する能力が高まる。

世界保健機関(WHO)は、二十年前前にボスターを配布した。それは、風邪に効く薬はない。風邪には、熱を下げず、食事を控え、安静、の三つを守ることを推奨している。

風邪を引いて食べずに安静にして寝ているだけでは心細いという人に、自分でできる治療法をお教えるると、「風邪を引いた」と感じたら、まず足湯か半身浴をする。そして、下痢を伴う風邪の場合は膝まで、それ以外の風邪ならくるぶしまでの湯につかれば、翌朝までに大部分の症状は改善される。体を構成する細胞核・DNAの



杉田博子 支部長

端にテドメアという物質がある。テドメアはDNAがお互いにくっつかないようにしているが、細胞分裂ごとにテドメアは短くなっていく。細胞の分裂回数は決まっており、分裂回数が多ければ多いほど寿命は短くなる。このテドメアを計ることである程度寿命が推測できるが、今年五月に行われたオースニック国際会議で、アメリカ循環器センターの大村博士が、膝頭の下の外側の少しくぼんだ三里の部分に刺激するとテドメアを延ばすことができる」と発表された。テドメアを延ばすことは寿命を延ばすことなので大変興味深かった。三里は、東洋医学の世界では昔から不老長寿のつばと言われ、これにお灸をすると万病に効くとされている。

次に、現代社会では、昔では考えられなかった新しい危険が起きている。その一つが電磁波。現在、我々の体に及ぼす電磁波の量は昭和三十年代の四千倍にもなっているとされる。電磁波を全く浴びないようにはすることは難しいが、多少なりとも防ぐ努力をすべきである。

活性酸素の害も問題。ゆっくり焦らすということが活性酸素を発生させない大切なポイントである。過激な運動やいらいら、ストレス



山内隆陽 同窓会会長

などが活性酸素を大量に発生させ、血管壁やDNAを傷つけて病気の原因となる。なお、活性酸素の発生を防ぐカロチンや生野菜などを多くとることも必要。

最後に、怠け者の健康法としては、胸腺を擦る。免疫力を高める。一日三回、一分間片足で立つ歩行一時間分に匹敵する。重なり逆らわない生活をする、を進めたい」と講演を締めくくった。講演会の終了後、会場を代えて、午後六時より、懇親大会に移った。大会の司会は、第69期・吉田雄治氏が担当。最初に、旧制・函館中学校校歌(同窓会歌)「玄冥の北の道……」を全員で合唱。雰囲気盛り上げた。

続いて、支部長の第52期・二上達也氏が、「大会には、本部同窓会長を始め、札幌、函館、関西の各支部関係者、函館市東京事務所、函館西、東両校の同窓会からも」出席いただいた。本日は函館を懐かしく思い出しながら語り合いたい」と開会のあいさつを行った。

次に、菅原副支部長が、総務報告として、二上達也支部長の退任と、新しく支部長に就任された第54期・杉田博子さんを紹介した後、杉田新支部長が、伝統ある白楊ヶ丘同窓会東京支部の支部長として、また

偉大な二上支部長の後任として、重責に耐えられるかどうか心配。皆さんの協力を得て同窓会を盛り上げていきたい」とあいさつした。

この後、来賓として出席された山内隆陽白楊ヶ丘同窓会会長、手塚泰彦同窓会支部長、鈴木進同窓会支部幹事長、厚谷純吉同窓会副支部長、近江茂樹函館市東京事務所副所長、広部卓也同窓会、新谷義克函館西高等学校・つじけ丘同窓会、小西弥生・渡部久二男・加藤東郎同窓会、高橋順吉同窓会、田村良人函館東高等学校・関東地区青雲同窓会副会長、新山春一同窓会幹事長をそれぞれ紹介した。

この後、杉田博子新支部長の音頭で乾杯し、懇親会に移った。

会場内には、例年と同様に、函館市東京事務所から寄贈を受けた函館の夜景や函館港の旧倉庫街、元町界隈などのボスターが多数貼られ、雰囲気盛り上げた。

一年振りあるいは久しぶりに顔を会わせた会員の間では、先輩、後輩の隔てなく会話が弾み、随所

で懐かしい函館弁が聞かれた。また、記念写真のストロポが光るなど、会場内は終始和やかな雰囲気にも包まれていた。

なお、今回の懇親大会では、大きなイベントの一つとして、歌手デビューしたの第98期・山形夕佳さん(芸名・うーみ)が、デビュー曲を含めて三曲を熱唱。会場を大いに沸かせた。

また、北海道七飯町産のジャガイモを産地から直送する同窓会特別賞を始め、函館市東京事務所寄贈のワインや会員寄贈の洋酒やテレホンカードなど、およそ九十点が用意された恒例の寄贈品抽選会では、賞品が当たる度に歓声が上がりがり、一段と雰囲気盛り上がりつつあった。

大会の最後に、校歌「火柱のはためく峰も……」を全員で合唱。次回の再会を約束して、午後八時三十分過ぎ終了、散会した。



来賓の方々



うーみ

第24回・東京支部親睦大会出席者一覧 (平成12年10月27日・星陵会館)

- 昭和10年卒(37期) 室谷邦雄
- 昭和13年卒(40期) 相馬正樹
- 昭和15年卒(42期) 飯島 繁・村山正郎
- 安富隼平・山内正彌
- 昭和18年卒(45期) 池上謹之助・池田和行
- 田沼修二・船木政司
- 昭和20年卒(48期) 篠田作衛・渡辺丞二
- 昭和23年卒(51期) 小野寺吉彦・柴田啓次
- 西村源太郎・早坂茂三
- 平野拓夫・三國比左男
- 昭和25年卒(52期) 石田 端・井上 稔・小泉龍彦
- 瀬田松吉昭・高尾忠良
- 長島 康・福津達男・二上達也
- 昭和26年卒(53期) 小林洋三
- 昭和27年卒(54期) 遠藤 宏・小宮山恵三郎
- 佐藤正郎・澤口幹男・高橋邦年
- 松岡康弘
- 片山明子・杉田博子
- 保田恵美子・横山笑美子
- 昭和21年入学 納代鉄也
- 昭和28年卒(55期) 赤澤 高・阿部 健・加藤富蔵
- 北原 徹・栗崎健一・香西 慧
- 田村保子・山口ヒロ
- 昭和29年卒(56期) 浅岡 勤・小泉文男・高橋正美
- 内藤 博・西田 実・吉田 孝
- 沢田経子・塚本弘子
- 松本佐和子
- 昭和30年卒(57期) 鷗島克孝・越後 明・桜庭 晃
- 澤田獄郎・吉田精吾
- 佐藤千恵・堀江郁子・松川澄子
- 藤原正樹
- 昭和31年卒(58期) 芹刈宏之・小林重行・田中二仁
- 昭和32年卒(59期) 坪田丞司・野村隆司・真船 昭
- 水木満雄
- 伊藤征子・加藤瑠美・前波翠子
- 北原耕太郎・佐々木寿一
- 高橋留美子・松田栄美子
- 相澤貞俊・大久保泰宏
- 昭和34年卒(61期) 岡本 興・加藤紀興・金子公彦
- 野波輝也・橋本正夫・畑中万弘
- 松岡正泰・米澤文隆



- 藤田美穂子・堀内恵子
- 三上和子・水麻紀子
- 昭和35年卒(62期) 荒井 浩・佐々木慎悦
- 辻 明・八田邦夫・松本光平
- 昭和36年卒(63期) 小林嘉則
- 土橋道子・福本元子
- 昭和37年卒(64期) 北村尚一・佐古紀興・鈴木三則
- 徳田定勝・山崎荣治
- 泉 清美
- 昭和38年卒(65期) 菅原大作・千葉恵寿
- 昭和39年卒(66期) 石塚昌子
- 昭和40年卒(67期) 岩間昌夫・松田幹夫・安田康次
- 昭和41年卒(68期) 木戸正文・山本晴義
- 大河原綾子・児玉久美子
- 細野ナツ
- 昭和42年卒(69期) 高木 隆・吉田雄治
- 浅田 香・梅田やよい
- 江澤富士代・長谷川八穂子
- 山本久恵・吉田淑子
- 米木かをり
- 昭和43年卒(70期) 石黒秀喜・佐藤勝義・高橋裕司
- 吉田昭二
- 兼田啓子
- 昭和44年卒(71期) 加納元雄・中村興治
- 昭和48年卒(75期) 土橋敏明・増田博幸・吉川忠幸
- 桑原洋子
- 昭和51年卒(78期) 垣板 清・島津路郎・高橋邦明
- 長澤一徳・成田吉道・山平匡人
- 岡部あさ子・富山香里
- 藤島清美・吉崎加代子
- 昭和53年卒(80期) 片瀬裕巳
- 昭和54年卒(81期) 松永 久
- 昭和56年卒(83期) 松 健二郎
- 平成5年卒(95期) 佐藤あゆみ
- 平成8年卒(98期) 境井宏明・山形夕佳
- 平成11年卒(101期) 石田雄一・大良信哉・小松祐樹
- 佐々木宏樹・早川直基
- 保立恵太・山本 司・中浜大輔
- 地道恵理・坂上美穂子
- 品川真由美・佐賀井奈美
- 下國なつよ



(5) 東京白楊だより

特集記事

函館と啄木



元・明星大学教授
塩野崎 宏

(50期) 宏

◎塩野崎 宏さん略歴
1929年(昭和4年)・函館生まれ。(函中在学中50期)旧制県立長野中学在学中に山下陸奥の弟子になり、やがて一路会の同人にしてみらしたが、就職後中断。メキシコから帰国後、復活した。歌集『書き込みのある地図』『空白の多い地球儀』『流水海図』『歌人山下陸奥伝』『海馬輯冊』『純林』編集・発行人。NHK短歌会、現代歌人協会、日本歌人会、神奈川県歌人会各会員。元NHK勤務・明星大学教授(英語)。

石川啄木が天逝して今年で90年。その時にこうした文章を書くのも縁であろう。

啄木と私

私が函館で過ごしたのは、末広町88番地に生れてから、遺愛幼稚園、青柳小学校を経て、当時の函中(庁立函館中学校)の二年生を終わるまでのほぼ15年間である。ようやく少年期を終わる頃までであったのだが、啄木程早熟ではなかった。彼が13歳で堀合節子と知り合ったような経験は、遙かに後のことであった。『石川啄木全集』



以上を述べた上で、あらためて私と啄木との関係を書くと、つても、血筋が繋がっているわけでは決してなく、一方的な当方の思い込みだけな

に収録されている最も古い彼の短歌は、15歳の時回覧雑誌『爾伎多麻(にぎたま)』に発表している30首だが、私が同じような試みをしたのは、彼よりも遙かに遅かった。啄木は、盛岡中学で文学好きの級友たちから盛んに知識を吸収しながら短歌と詩の制作や文芸誌の編集・発行にのめり込んで行く。そして堀合節子との恋愛にも懸命となる。与謝野鉄幹が始めた雑誌『明星』の社友となって忽ち認められ、また明治38年20歳のとき、詩集『あこがれ』を出版した。自分の才能に自信を持ち、将来を明るく展望する青年であった。

彼は短い生涯に実に良く学んだ。次々と新しい知識を吸収した。最初陸軍軍人を、次いで海軍軍人を志したが、級友の及川古志郎(後の海軍大将、海軍大臣、軍令部総長)に、文学の面白さを教わって感化されると、こころと宗旨替えをした。他人に教わるのに謙虚であった。彼の言葉の豊富さが、彼の広く深い勉強の一つの証明である。そしてその短い生涯の最後に、社会主義に目覚め、幸徳秋水の事件に関して、詳しく調べ、細かいノートを取ったことが記録に残る。よしんば彼が短歌を残さなかったとしても、知識人としての彼は、素晴らしい足跡を残して見せたのであった。

次思い出すのは、函館の大森海岸の小公園に置かれた彼の銅像である。良く知られた、彫刻家本郷新制作の座像で、前かがみに座り、物思いに耽っている像は、理想を追いつけ、一方現実の生活では苦しみぬいた彼を良く象徴していると思われる。この像を、私は離れてから四分の一世紀も経ってやっと訪れた函館で発見し、遠景を臥牛山として座っている見事な造型として見たのであった。今一つ言っておきたいのは、多分当時函館市内の小学校で使われた副読本に採録されていたものと思うのだが、啄木の次の短歌作品を青柳小学校で読み、今に覚えていることである。言うまでもないが、啄木と青柳町は密接な関係があり、その地名を冠する小学校へ通ったことは、卒業生の一人である私にとって、そこはかたない誇りの一つなのである。

小さな洋品店を経営していた私の生家は、末広町の電車通りに面していたので、港も山も近く、鷺はよく見かけた。羽根を動かさずに悠々と円を描いて中空に浮かぶこの鳥の名前を、私は啄木のこの歌で覚えたような気がする。そして、他

鷺を庄せる
潮ぐもりかな

港町
とろ、と鳴きて輪を描く



宮崎 郁雨

の人口に膾炙した啄木の多くの歌に比べて、地味ではあるが、函館に直接取材し現実を写した歌として、私には大切なものなのである。

この作品の発表は、啄木が函館を去って4年後のことで、彼は東京に住んでいた。そしてこの「われ等の歌」は、同年の4月21日、4月27日、5月8日、6月5日とつづく。それ以後も続いたのかもしれないが、熱心な啄木研究者の苦心の調査によって発見されたものであって、これ以上は見つからないのかもしれない。それにしても、全部で5回5首の掲載が確認された中、掲出の作品が最も写実的で、私などには好ましい。若い頃には、彼の感傷的な作品にひかれたことも結構あったのだが。

函館の啄木

啄木が函館へやってきたのは、明治40年5月5日のことである。そして、函館商業会議所へ勤務したのち弥生小学校の代用教員とな

り、最後に函館日日新聞の編輯局に勤めた。その間、青柳町45番地の首稽社に起居し、雑誌「紅首稽」の編集を担当した。僅か4カ月の間に3度も職を替えたのだった。

親友で恩人の宮崎郁雨などが影で面倒を見てくれたからこそだったのだろうが、この生活も8月25日夜の火事で挫折し、9月13日の夜行列車で札幌へ向かうことになって終止符が打たれた。わずかに4カ月の函館滞在であった。

東川町から出火し、折柄の山背に煽られて全市の3分の2を焼いたこの時の大火で、学校も新聞社も焼けた。宿舎である首稽社も危なかったが、「漸くにしてまぬかれり」と彼は日記に書いた。また、8月27日の日記には、「かの夜、予は凡てを忘れてかの偉大なる火の前に叩頭せむとしたり、一家の危

安毫も予がこころにあらざりき」とし、「大火は函館にとりて根本的の革命なりき、函館は千百の過去の罪業と共に焼尽して今や新しき建設を要する新時代

となりぬ、予は寧ろこれを以って函館のために祝杯をあげむとす」と記して、やややけ気味に、この

大火によって自分と函館に新しい運命が開けることを望んでいる気配であった。

このように、大火に追われる様にして函館を去った啄木であったが、翌年正月

6日の日記には、函館を懐かしむ文章を残した。よほど良い印象を彼は函館について持ったのであつた。(以下原文通り)

一月六日

昨夜枕に就いてから魂何時となく遠く飛び、色々な過去の姿が追憶の霞の奥に現れつ消えつとする。函館が恋しかった。実に恋しかった。夜霧深き大森の白浪、露光る谷地頭の朝風、宮崎君吉野君若崎君大塚君の太い声も聞きたい。弥生校の、今は焼けはてた職員室も忍ばるる。青柳町という名は、何かしら昔の恋人の名のごとく胸に繰り返される。眠ったのは、二度目の金棒の響過ぎて余程経ってから。

この文章を、啄木は多分釧路で書いている。前任地小樽で日報社の事務長と喧嘩をし、釧路新聞に職を得ていたのであつた。そして、

かの年のかの新聞の初雪の記事を書きしは我なりしかな

という作品を後に生んだのであつた。

ところで、啄木が職を得て渡った函館は、実は彼にとって初めてではなく、4度目のことだった。

最初は明治37年9月末、19歳の彼がやってきた。小樽に居る姉を訪ねて、詩集『あこがれ』の出版について費用を出してもらうため

であつた。当時義兄の山本千三郎は、小樽中央駅に勤務する鉄道職員だったのである。日本郵船の陸奥丸で上陸した彼は、函館に一泊した後ドイツの貨物船で小樽に向い、10月18日小樽から汽車で函館に戻ったのち、海峡を渡って故郷へ戻った。その次、3度目は、明治39年2月のことで、函館駅長に転動していた義兄に、結婚したばかりで職業もなく、生活に苦しい彼が、無心に訪れたのであつた。だから函館は、啄木にとって充分に土地鑑のある港町であつた。

なお、啄木が最晩年に異常な程の関心を見せる幸徳秋水も、明治36年8月に函館を通過して北海道の視察旅行にやってきている。

当時北海道は、本州方面で食い詰め、一旗上げようと考える連中と、日本の将来に関心を持ち、北海道の現地にその可能性を探ろうとする人々の両方から注目を浴びていたのであろう。

啄木の表芸

さて、「あなたの職業は一体なんだろう」と啄木自身に聞いたとすれば、どんな答えが返ってくるだろうか。

啄木は多才の人であり、天が彼により長い生命を与えたとすれば、詩でも評論でも一家を成したであろうこと疑いも無い。しかし若くして死んだ彼は、自分を小説家と思いたがっていたのではないかと私は考える。何故ならば、啄木が函館へやってくる前年の明治39年に上京した際、彼は漱石や藤村の

作品を読んで小説への自信を深め、函館を去った翌年に再び上京して小説の執筆と売りこみにかかったが、全く成功せず、生活は貧困を極めた。そして金田一京助に救われたのであつた。宮崎郁雨に次ぐ生涯二人目の恩人親友である。

啄木が辛うじて収入を得、彼の一家がそれを頼りとしたのは、浜民村と函館市の代用教員としてであり、また函館日日新聞、小樽日報、釧路新聞と続く北海道の地方新聞の記者としてであつた。函館を去ったのち、7カ月ほどの放浪とも言うべき行脚を終れた後上京して、東京朝日新聞の校閲記者として生涯を終わるのだから、小説家を志しつつ、実生活の面からすれば新聞記者という職業が彼を支えたということになるのであろう。

彼の息のある間にと、第二歌集『悲しき玩具』の出版に奔走した、3人目の恩人親友である土岐善麿(当時の筆名は哀果)は、啄木とほぼ同じ頃歌人として出発し、明治43年に歌集『黄昏』を出したが、その中に

りんでん機、今こそ響け。うれしくも、東京版に、雪のふりいづ。

の作を残しており、かつての京橋滝川町にこの歌を刻んだ歌碑がある。この歌に呼応するように、明治41年上京して東京朝日新聞に就職した啄木にも、次のような作品がある。何れも『一握の砂』所載のものである。



啄木小公園

評価が定まっているようであるが、その歌集の一つに『悲しき玩具』のタイトルが付けられたように、彼にとつての短歌は、正に「悲しき玩具」なのではなかったか。つまり、啄木自身にとつて、歌人という自称としては大変に低いランキングではなかったかと考えるのである。

今一度、啄木の函館時代を振り返るならば、彼の死まであと4年。その残りの生涯を充実したものとするため、函館の4カ月は、結果として彼を函館から追い出すこととなった明治40年夏の大火を含めて、よほど重要なヒントを彼に与えたのではなかったらうか。

春の雪
銀座の裏の三階の煉瓦造に
やはらかに降る

京橋の滝山町の
新聞社
灯ともる頃のいそがしやかな

善磨は当時東京読売新聞の記者であった。新聞記者として、啄木の先輩であったのである。人生において、明治19年生まれの啄木より、8カ月ほど年長であった。因みに宮崎郁雨は明治18年生まれ、金田一京助は明治15年生まれで、啄木の恩人親友トリオの中では、最年長であった。

歌人啄木

世間一般に、啄木は歌人という

ての新しい運命が開けるかに思われた。もとより、彼の健康がそれを許さなかったことを我々は充分に承知しているのであるが。

啄木の残した函館の歌

歌詠みとしては、自分のことをそう高く評価しなかった啄木ではあつたけれども、彼はその時々々の感興に任せ、自分の才能に任せて、多くの短歌を作つた。

歌集として残つた『一握の砂』と『悲しき玩具』の二冊が良く知られているし、未だに文庫本などの普及版が売れている状況である。その中で、明らかに函館について歌つたと分かる作品を紹介しながら、函館に対する啄木の気持ちを考えてみたい。

念の為に触れておくと、啄木の短歌作品は、歌集に発表する時はすべて3行分が書ききつていゝ。この短歌の書き方は、近代において、先に上げた土岐善磨が「哀果」の筆名を使つていた明治43年に「NAKIMARU」というローマ字表記の歌集を出し、これが三行分が書ききつていゝことによる。啄木はこれに心を動かされて、同じ方向での試みをしたのであつた。

函館の青柳町こそかなしけれ
友の恋歌
矢ぐるまの花

余りにも良く知られている作品だが、昭和9年の大火の後に作られた青柳小学校に、一年生から六年生まで殆ど無欠席で通つた身に

とつて、懐かしい歌である。「青柳町」は、紅首槽社同人の一人、松岡政之助が下宿していた家で、啄木も同じ場所へ起居するのであるが、歌われている矢車は、その青柳町での実際の見聞である。矢車は、矢車菊と矢車草の二つあり、矢車菊は欧州原産でドイツの国花である。キク科に属し、高さ80cm、夏、枝の頂上に径約4cmの筒型の花を開くが、色は青、青紫、淡紅、白などである。一方の矢車草は、ユキノシタ科の大型多年草で、深山に生える。初夏高さ約80cmの花茎の頂上に白い花を沢山つける。

以上が植物図鑑が教える「矢ぐるま」の花である。恐らく専門家による精緻な研究もあることだろうが、筆者としては欧州原産のキク科の植物説を取りたい。青柳町は、洒落た住宅地で、ついつい口マンチックな気分になる所である。特に、長いご無沙汰の後に函館を訪問し、立待岬に残る啄木一家の墓に参つた後、青柳町へ廻つてみた時の感懐は、忘れることができないのである。友は、紅首槽者の誰かに仮託したものであろうが、実態は無くても良い。

しらのみの寄せて騒げる
函館の大森浜に
思ひしこども

さらつと歌つていて、嫌味が無い。今も啄木の頃と同じように砂

浜が広がる大森浜に、この文章の始めの方で書いた、啄木の銅像が座つてゐる。若い、理想に燃える小振りの男が、やや打ちひしがれた姿に造型されていて、彼に寄せた函館の好意を象徴するような、好ましい像である。

この像の台座には、
潮かをる北の浜辺の
砂山のかの浜薔薇よ
今年も咲けるや

を「一握の砂」から引いてあるが、これについて、同じ歌集でも、より官能的な

砂山の砂に腹這ひ
初恋の
いたみを遠くおもひ出づる日

の歌を出すべきであつたと不満を言う人も居たりして、全国的な啄木ファンのような意見に、啄木も微笑していることである。

函館の臥牛の山の半腹の
碑の漢詩も
なかば忘れぬ

箱館山を臥牛山と呼ぶのは、よほど以前からのことであろうか。かなり特異な地形であるから、函館に心を寄せる人ならば、滅多に忘れられないポイントである。私の少年時代には、函館山は重砲兵大隊が管理する要塞地帯であつて、立ち入り禁止であつた。谷地頭に祀られる函館八幡宮、その近くの



明治40年の大火

碧血碑、その近くにある俠客柳川熊吉の碑、その他、もろもろの碑が山腹にあるのであるが、啄木の見た漢詩が彫られているのは、どの碑であるか。明治の教育を受けた人にとっては、漢詩を読み解くなど、容易いことであった。

函館のかの焼跡を去りし夜の
こころ残りを
今も残しつ

明治40年の函館大火は、離れ離れになっていった夫人節子が、長女京子連れて函館に着き、青柳町18番地に家を借りて久しぶりに一

家水入らずの生活を始めていた矢先のことであった。弥生小学校も焼けたが、啄木は夏休みが終わってから辞表を出そうと思っていたのが幸いして、もう少し給料を貰えるのであった。彼は知人に履歴書を託して札幌へ移る準備を進めながら、焼けた小学校の後始末を手伝った。この作品は、翌年東京へ落ち着いてから作ったものである。全市焼跡となった函館を去るに当たり、愛着を感じたのだったが、その感情は、今でも変わらないと、函館に対する懐かしさを素直に表出している。

北海道新聞社編『はこだて歴史散歩』（昭和57年刊）に教えてもらっているのだが、船見町の地藏寺境内に「万平塚」といつのがあり、これは明治から大正にかけて有名だった乞食を供養する塔と言った。私は見たことが無いが、門口に立つて物を乞うのではなく、毎朝家々を廻って、肩物入れから食べ物を持って歩いていって、彼を函館から追い立てることになった明治40年の大火のときには、見舞っているとのこと。そして

わやわやと
口の中にてたふとげの事を呟く
乞食もありき

の『一握の砂』の歌は、乞食万平を歌ったものと言つ。

鉄幹・晶子

啄木は早く「明星」の会員とな

り、与謝野鉄幹に認められて歌壇に登場し、後に上京してから文学的にも生活の上でも鉄幹や晶子の世話になった。啄木の短歌の多くの部分が「明星」に発表され、「明星」が廃刊されると、啄木自身も後継誌「スバル」の発行人に推されるなど、その縁は薄くない。

浜菊を郁雨が引きて
根に添ふる立待岬の
岩かげの上
鉄寛

啄木の草稿岡田先生の
顔も忘れど
はこだてのこと
晶子

宮崎郁雨はまだ壮年であったし、当然二人の函館訪問に同行したであろう。岡田先生と言つのは、啄木の草稿を保存している函館図書館の岡田健蔵館長のことであった。鉄幹、晶子の二人は、貴重な啄木の遺稿などを、函館図書館で見せてもらい、若く逝つた天才への思いを新たにしたい事である。

平出修のこと

この文章のテーマである函館からは少し離れるが、啄木が強い関心を持った幸徳秋水の関連で、平出修について一言触れておきたい。秋水の事件と言つのは、天皇を暗

殺しようとしたとされるでつち上げで、絶対主義時代の日本の汚点の一つであるが、平出修は、担当の弁護士として早くから真相を見ぬき、当時として出来るだけの対抗策を取ったのであるが、及ばなかった。啄木は平出から資料を見せられて細かくノートを取り、最晩年の評論に生かしたのであった。その平出は新潟県生まれ、短歌や俳句の実作にも手を染めて、「明星」に短歌や評論を執筆した。後に「明星」が廃刊になると、啄木などに呼びかけて「スバル」を発刊し、発行所を自宅においたのである。最初の発行名義人は、石川啄木であった。

ハユダデ

啄木が函館に住民として過ごした43年前に、日米和親条約の調印を済ませたペリー提督の艦隊が、まだ箱館と表記されていた港を訪問したのだが、後に米国議会に提出されたペリーの公式報告書には、この港を「Hogabae」と表記されている。現地での発音を、そのまま転記したもので、甚だ貴重である。この呼び名をそのまま誌名とした隔月刊の定期刊行物もあって、函館っ子のしたたかさを示すものともなっている。

南部育ちの啄木も、これに近い発音を現地ではしばしば耳にして、親しみを覚えたのであろうと今は僅かに推測するだけである。さて、幼年時代の私の覚えていた函館は、都市ガスを具え、市街電車が運転され、電話局もある、

れつきとした大都会であった。人口も20万、これは札幌、旭川、室蘭、帯広、小樽みな同じで、別に悪平等ではなかったのだらうが、北海道が各地方平均して開発、発展している証拠のように思われていた。

箱館戦争後、北海道開拓と北洋漁業の根拠地となったこの港町の発展は素晴らしく、明治13年には船舶製造修理の会社、函館鉄器械製造所（後の函館船渠）が設けられたのを始め、明治22年には横浜に次いで全国で二番目の上水道が完成、明治11年には、北海道で初の新聞である「函館新聞」の発刊も見た。啄木が務めた「函館日々新聞」は、まさにこれに対抗する気鋭の新聞であった。

一方、函館は後々まで大火に見舞われる運命の都市でもあった。明治期には、100戸以上の被害があった火事が一九回記録されている。啄木が函館での再興を断念せざるを得なくなった明治40年の火事は焼失戸数12、390戸で、当時の市街地の大部分を焼き尽くす大規模なものであった。

明治31年には鉄道馬車が敷設され、やがて市街電車となった。また明治37年には、鉄道が小樽まで開通し、啄木にとつても函館にとつても明るい前途が開ける予感が充分にあったのに、啄木が短い滞在をしただけで函館を去らねばならなかったのは、まことに残念な挫折であったのだとあらためてしみじみと思うのである。



懐古小感

42期 (昭和15年卒)
田沼 静一

一九二三年生れ七十九歳、函館が故郷。相生町の家から函中に電車を通った。デブの教頭大久保先生はいつも電車の座席で新聞を読んでもらわれた。仙台の二高に入学、その年七人も合格、函館の様な僻地から七人もと二高の先生方大いに驚かれた様子、その中に土井晩翠先生がおられる。函中校歌の作詞者である。玄冥の北の一道、宇賀の浦万頃の水は、函館が余程辺鄙な処と思っておられたのではないか。終戦の年の九月、半年繰り上げて東北大学を卒業し、東北大学金属材料研究所で極低温の伝導研究に従事した。十年を経て東京大学の物性研究所に移り六十歳で停年、次に群馬大学工学部に行き六十五歳で停年、最後にいわき明星大学理工学部を七十四歳まで勤

めて辞めた。ずっと研究室にいたが、物理の研究は面白かった。さて、私の育った相生町は、今町名はないが、所謂山手の下の方で、西は函館公園、東は谷地頭電車通、東京の下町風情、仲々繁華な街であった。落語家が住み、常設芝居小屋があつて、花見時には函館公園にすらつとカフェの出店が並んだ。何が玄冥の北の一道か。

函中の制服はサイズで、靴は皮靴だったし、仙台の方がずっと田舎臭い。ロシア正教のガンガン寺の元町風景、トラピスト廻りの野生スズラン、函館工業裏の水芭蕉の群落等、限りなく懐かしい。ところで函中では生物(植物)班だったので、班長の柳田先生「ボチ」のお世話になつた。後から来られた柳田先生は動物の先生で「イロボチ」。津軽海峡プラキストンライン以北の草木をボチが、昆虫をイロボチが研究しておられた。国語の安保先生は教壇上で「手を翻せば雲となり手を覆せば雨となる」と舞われた。翁と言つて相応しい容貌であつたが、お若かつたと思う。君等は「素敵」と言つが、「詩的」が正しいのではないかと申された。クラス担任の高島先生は歴史の先生で仇名はボンズ。親切な方だが毀誉褒貶が多くあつた。四面楚歌の項羽が自裁の場面で、逆刃を首に当てグツと押し、首が落ちる真似をされ、生徒一同アツと驚いた。絵画の上田先生、教練の石戸谷先生。配属将校の印南中佐「マントラ」は太い髭が逞しくよく怒鳴られた。冬トラピスト附近を行軍中、例の如く雷を落している最中、ワルガキ生徒が谷の向い側の雪に靴で点々と悪口を書いたこと等、思い出せばきりが無い。

仰げわが紅顔の子等

42期 (昭和15年卒)
安富 隼平

函館とは何だらう。昔は東京の下町に似て魚臭い賑やかな街、今は内地の人々の憧れるパタ臭い街いずれにしてもユニークな故郷である。

函中校歌が同窓会歌となつて、東京白楊ヶ丘大会でも唱われるが、年々声が細くなるのを寂しく思う。さて、校歌斉唱で特別忘れ難いのは、修学旅行の中盤、大阪城広場に於ける眠気覚まし斉唱である。連日の史蹟巡りに、目を擦りながらバスを降りたところ、ボンズの指示で池田雄進(敬称略、以下同)が音頭をとり斉唱した。麗しきバスガイド感激してアンコール。池田照れて引つ込む。代つて剛健の柳沢勉音頭をとり再度の斉唱をした。昭和十年以来六十六年、百遍以上は唱つているから、意自ら通ず。口語訳左記の通り。

- 一、遙かなる北海道の入口の岸辺に、若く美しい英才を教育する学舎がある。
- 二、集う若者は千余人、人生の花の咲き初めた頃、共に心身を鍛練して至高の境地を目指す。
- 三、学舎前方の宇賀の浦には空に接する大海があり、後は駒ヶ岳が高く聳える。微を積んで高山となり、一滴の水も集まれば空を浸すことが出来る。
- 四、白楊魂を忘れるな。仰ぎ見よ我が紅顔の子弟達を。学業成就の暁には君達に国の運命を担つてもらふのだ。

五、卒業生の活躍で母校の名声が高くなるのは在校生の名譽である。しかし名声の維持には不断の研究を要する。任重く道の遠いことを思い、我等健児ただ努力あるのみ。

一番から三番までは函中の所在地、学生の勉強ぶり、校舎をめぐる環境。四番は教師、卒業生、父兄の激励と期待。五番は在校生の答辞。花と香は名声と努力の萬鳥。作詞者土井晩翠は仙台の人、藤村晩翠時代を形成した詩人、又英文学者、ホメロスの訳者として知られる。ツチイをドイと改めたのは方言がツとチの区別なく、他姓との混同を避けたものと言われる。なお、函中校歌には安保白袍先生(9期・明治40年卒)の漢訳詩がある。試みに訓読する。

函館中学校校歌

神州の北門水明の郷、
学苑夙に聞く誦絃の場。
青春琢磨す方寸の玉、
剛正節を持鉄石の腸。
駒敵千仞雲を銜いて立ち、
宇海萬波空を浸して長し。
元知る積塵積を成し
集滴海を成すを。
氣宇只合に
八荒を呑むべし。
同じく是れ昭代有為の子、
耿耿の心暫くも忘れず。
薰陶功は譽運と與に盛なり、
英俊公に奉じて声名揚る。
校訓白楊魂と題する有り。
挺幹天を衝く何ぞ軒昂なる。
好し是れ
一気聲根錯節を芟除し去り、
鴻道を宜昭して萬方に向はん。

地域の人の健康と幸福のために
—高橋信君の病院葬に列席して—
43期 (昭和16年卒)
續 豊

今年三月三日、函館の高橋信君が亡くなった。我々四十三期の仲間であり、元町の高橋病院理事長であり、同期の總め役として長年に亘つて尽力してくれた人であった。小生がここに筆を起すのは単なる同期の友人が一人亡くなったことを報告する為のみではない。昔から人は死んで初めて真価が定まるといふが、彼は生きていた裡から大変な人物だなあと予感していた。

三月二十四日、国際ホテルの式場は七百余名の会葬者で溢れ、献げられた生花は式場に供え切れず、その数は六十基にも及んだ。読経の僧侶は十人。参列してこの様子を眼のあたりにして、改めて彼の偉大さを実感した。葬儀が盛大だったからというのではない。これだけの葬儀をさせた高橋信という人物が函中の卒業生、我々が学んだあの白楊ヶ丘の校舎から巣立つた仲間の中にいたということを知つてもらいたい。誇りに思つてほしいと思つて書いています。

とかく地位だ、名譽だ、金だという時代に、市井の一医療法人、高橋病院の理事長として三十五年の長きに亘り、ひたすら地域の人達の健康と幸福のために、にこやかな笑顔を絶やさず、巧まざるウイットを交えて会つ人々を和ませ、それを生き甲斐としてきた男が亡くなったのである。

東京の同期会にもよく出席してくれた。麻雀の好きな人で、若い

頃は東京へ来て徹夜も辞さなかつた夕なひとであったが、昨年十二月不測の病に倒れ、それから二月余り、意識が戻る後一歩というところで亡くなってしまった。

「高橋病院」が、「ゆとりろ」がどれ程地域に貢献してきたかは地元の方達は皆知っている。その陰に高橋信君の大きな力があつたことを忘れてはならない。我々四十三期生は彼の賞利や名譽を求めず、人の為世の為に医療を通して地元に着し、貢献して逝つた彼の生き方に満腔の敬意を表し、その豊よ安かれと祈るものであります。同時に同様の諸子にもこのように近來類稀なる大人物が函館にいて、何も求めず、やれるだけやつて死んでいったということを感じてとめておいてほしい。

我々同期の者は神山茂郎君に懇るなお経をあげてもらい、葛西善一郎君に心暖まる甲辞を捧げてもらつて最後の別れをし、彼を彼岸へお送り上げました。 合掌

狩人の合唱

—音楽教師 林先生の追憶—

45期（昭和18年卒）

村上 国男

私が、昭和十三年に入学した旧制中学校では、低学年で、図画、工作のような幾つかの芸術的な履修科目があつた。どれも嫌いで苦痛だったが、音楽だけは例外で楽しかった。農村の小学校で、古びたオルガンで唱歌を教わつた私にとって、専用の教室、びかびかのグランドピアノ、そして専任の先生等、なんと新鮮に映つたことか。殆どの生徒が上級学校へ進学し、国漢英数の教科を重視する中学校

で、音楽の教科を三年生まで課した学校は珍しかった。

専任の先生は、東京音楽学校、声楽科出身の林先生であつた。あけすけな性格の方で、授業の半分は先生の雑談に終始した。いつも必ず出てくるのが、ご自分で飼つておられたシェパード犬の話が主で、駄犬しか知らない我々には物珍しく、リラククスした楽しい時間だつた。

そんな先生でも、受験校の中で、音楽担当教員としての扱いには、不満があつたのだろう。ある時、こんな話をされた。

「他の教師が、皆五円昇給したのに、俺だけが三円だつた。音楽の教師だからといって、こんな不合理な事があるか。だから俺は校長に談判して、五円昇給させてもらった」と。

この時だけは、世の中の厳しさをかいまみた思いがした。

オーストックスに音楽を勉強された先生は、生徒に対し、いつも、「口を大きくあける、姿勢を正しくしろ」と、やかましく注意された。当時の流行歌（今で言う演歌）を大変嫌い、いつも、あんなのは、音楽ではない。『邪道だ』と軽蔑しておられた。又専攻ではなかつたが、時々、ピアノ曲を解説付きで弾いて下さつた。ベートーベンのソナタ『月光』など、なんてすばらしい曲なんだろうと感動したことが、昨日のように蘇ってくる。

三年生になつた時、先生が「今秋、市内のNホールで音楽会をやることになった。三年生は、全員で合唱を行う」といわれた。当時、男子の中学校では、校内で弁論大会や、武道大会の催しはあつた。しかし、音楽会、それも校外の施設を借りての開催は、希有のことだつた。

合唱のテーマ曲は、ウェーバー作曲、歌劇『魔弾の射手』の中に出てくる『狩人の合唱』と決まつた。中世紀貴族の狩獵の様子を歌つた、三部合唱であり、私は中音部のグループに入った。それ以来、音楽の時間は毎回、この合唱の特訓だつた。

音楽会の当夜は、物珍しいのか、前評判が良かったのか、Nホールは在校生始め、父兄で満席だつた。当日主役の林先生は、タキシードで正装し、『二人の擲弾兵』他、二曲歌われたらどうか？ ピアノの伴奏は、市内の高等女学校で教鞭をとられていた、同じ音楽学校出身の根上先生であつた。根上先生は、この音楽会のために、すばらしいピアノ曲『舞踊への勧誘』を演奏してくださつた。

一、二年生のテーマ曲や、高学年の音楽部員が何を歌い、何を演奏したのか、全く記憶はない。とにかく三年生の出番になつて、約二百五十人の生徒が、びつり壇上にならび、練習を重ねた『狩人の合唱』を歌つた。出来、不出来はともかく、大勢の観客の前で歌つたのは、我々にとってはじめての経験であり、又とない思い出になつた。会は盛会に終わった。

だが、この音楽会には後日談がある。当日、生徒の中にNホールのレストランに忍び込んで、砂糖を盗んだ者がいて、問題になつた。ちよつとした、いたずらのつもりだつたが、林先生が、一生懸命になつて催してくださつた音楽会も、つまらないことで、ご期待を裏切つてしまつた。

その後、戦争が激しくなつた為か、砂糖事件が災いしたのか、音楽

会開催の話は、ついぞ聞かないまま、私は卒業してしまつた。多感な少年時代の三年間、オーストックスな音楽の指導をして下さり、音楽に対する気持ち育てて下さつた林先生と、たつた一度の思い出。『狩人の合唱』は今でも忘れぬ。

「ニュートキー」の歩み

46期（昭和19年修）

渡辺 保一

在京の46期同期会は毎年有楽町の「ニュートキー」で行つていきます。この「ニュートキー」の発祥の地が函館ということに亘つて利用し、今後も46期同期会が存続する限り利用したいと思つていきます。

以下「ニュートキー」の歩みについて概略ご紹介いたします。

記

「ニュートキー」の前身は大正時代日魯漁業の代理店として海産物問屋を営業していた「森卯商店」です。（函館市大町9 17 辺）

大正12年9月1日

関東大震災を機に北海道庁の要請で海産物を東京に送り込む

大正13年9月20日

「函館森卯商店東京出張所」として東京に進出

昭和8年4月9日

日魯漁業との関連で新宿に「エビスビヤホール」を開業

昭和10年6月1日

渋谷に「エビス生ビヤホール」を開店

昭和12年6月9日

数寄屋橋に「ニュートキー」を開店

昭和21年7月4日

数寄屋橋本店、渋谷店が進駐軍専用のビヤホールとして開店

昭和27年11月24日

大阪第一生命ビルに戦後最大のビヤレストランを開店

昭和28年7月1日

東京八重洲口に駅ビル第一号「ニュートキー」を開店

昭和28年7月

日本初のビヤガーデンを開設

昭和32年10月9日

数寄屋橋本店完成（9階建）

昭和41年6月1日

札幌にビール工場直結の「サツポロビール園」を開店

昭和60年3月30日

山手線恵比寿に「ピヤステーション恵比寿」を開店

平成12年現在

171店舗 夏期ピヤガーデン 15 店舗

私が長年に亘つて「ニュートキー」を利用している理由は、初代社長の森新太郎氏（生家は今でも大町に在る）と従兄弟の森卯一郎氏の大都会進出の野望と、たゆまぬ努力に対する敬意と称賛、そして時代こそ違え面識はなくても同じ函館に生をうけた同郷の誼であり、郷土愛の気持ちからでもあります。従つてこの広い東京に住み、年に一度の同期会が私たちに新たな力と元気を与えてくれます。また、この会場に来るたびに下させてくれます。以前、函中出身の方が何人が「ニュートキー」で役員として活躍されておりました。

皆さんも同期会やその他の会合などで一度「ニュートキー」をご利用されては如何ですか。

ふるさと函館を誇りに

54期（昭和27年卒）
杉田 博子

連絡船のドラの音で函館を離れ東京へ嫁いで来たのが昭和三十一年である。その頃は市場へ行っても函館の魚のような新鮮な物がなくて馴れる迄には時間がかかった。暑さに弱いのを理由に子供達が塾通いをする迄は恒例のように七月末から九月に入る迄函館へ帰っていた。父母が健在だった頃は足繁く函館へ帰ったが今は両親も亡くなり回数も減ってしまった。

お友達を函館へ案内すると、それぞれにエキゾチックな函館の街や夜景、美味しい食べ物ほめてくれるので私のふるさとには素晴らしい街だと鼻が高くなる。今でも帰る度に気の合った友人達が歓待してくれる。室生犀星の詩に「ふるさととは遠くにありて思うもの」とあるが、私にとっては身近な所であり幸せを感じる所なのである。

今から何年も前の事である。息子のクラスメートが北大水産学部に合格した時、その子のお母さんが下宿を探しに函館へ行つて、とても親切な大家さんのおばさんに会って決めて来た事をPTAの集まりの時話してくださった。そしてそのおばさんの話し方が杉田さんとそっくりだとまわりの人達と大笑いした事がある。結婚して四十年余りも経つのに私は未だに函館弁の訛りがとれない。よそへ電話をかける時「もしもし」と云っただけで、「あ、杉田さん？」と云われてしまう。想い出すと笑い出してしまふ。でも函館弁には愛着

がある。

色々な会で「函館の人」を吹聴しているらしく、つい最近もある会です。いつもは会釈でいどの先輩が「函館へ行つて来ましたよ。色々な夜景を見たけれど函館は素晴らしい街だ」と云ってくださった。うれしくなって函館に代わつてお礼を申しあげた。夜景だけでなく数々の偉業をなしとげられた諸先輩、そして今第一線で活躍している後輩諸君をみて、函館は立派な人達が巣立った素晴らしい街であると自負している。

続・住んでみたアメリカ

63期（昭和36年卒）
山崎 良英

ふとしたきっかけで、日本で勤務していた米国企業との合併会社からアメリカの親会社に向向することになり、定年前の最後のご奉公と思つて単身赴任してから、2年4カ月になりそろそろ帰国のタイムミングを考へる時期になりましたが、この間過ごしたアメリカの印象をまとめてみました。

これは東海岸南部のノースカロライナ州の小さな街で過ごしたごく限られた経験に基づきますので、アメリカ全体を表している訳ではありません。他の方の経験されたこととは幾分違う面があると思ひますのでその点はお許しください。

私の住む小さな街はノースカロライナ州のロッキーマウンテン市と言ひまして人口は約5万人。かつては綿花とタバコの集散地として繁栄したそうですが、今はのどかな緑の中に広がる農業と工業を抱える典型的な地方都市です。ニューヨークとマイアミの丁度中間に

あたり、地図を開いて戴くと海岸から少し入った真中あたりで州都ラレーから100kmほど東にあります。この州は横に長い州で、この街から海まで約3時間、東のアパラチア山脈のふもとまで約5時間車で掛かります。アメリカ人にとってはこの位のドライブは長距離には入らないようで、マイアミまで13時間余りを平気で家族連れで移動します。



海は当然大西洋で、砂浜が続く良いところです。隣のバージニア州へ北上すると、バージニアビーチと云ひまして大きな観光地があり数軒のホテルが立ち並ぶ有名なリゾートがあります。

一方山のほうは山並みを抜ける山岳ハイウェイがやはり北のバージニア州迄続いていて国立公園として管理され快適ドライブが楽しめます。ことさら山と言つのはこの山岳地帯を除いたこの州の大半は全くの平地でとにかく5時間走らないと山は全く見えないのです。気候はかなり暑いところなのですが、12月〜2月は温度も朝は零下になるし雪も年に一、二度降り四季の感じられる所ですが、やはり年平均で見ると暑い所と言つ方が当たつてるかも知れません。

この街で見聞きしたことを中心に、アメリカの断面を衣、食、住から見て見ますと、まず「衣」ですが前述のようにかなり気候が温暖なので、ほとんどの期間は半袖で皆さん過ごしています。盛夏になるとTシャツ、短パン、サンダル姿が基本形となります。しかし何処へいっても冷房がガンガン効いてるのでどうしても我々は長袖が必要で、アメリカ人には笑われますが、どうやら体温が違つのではないかと思わ

れます。ビジネスカジュアルと言う便利な言葉がありまして、日常の仕事でもこのスタイル（短パンや、Tシャツはルール違反なので）で過ごしています。外来者も又他所の会社を訪問するときもこれで通せるのです。お客さんの要人の訪問があったり、あるいは少しフォーマルな会議のときは、ドレスコート・ウイスタイの指示が出て、皆仕方なくスーツにネクタイ姿で会社に来ます。

一方教会へ行く人の服装を見てるとときと黒いスーツを着、女性にはドレスアップして行くし、小さな子供達も精一杯おしやれをして出かれますから宗教の占める位置もお分り頂けると思ひます。とにかく日本のように背広姿が必要条件と言つことがない世界にいますと、これまでの感覚はすつかり否定されて、確かに会議は服装とは関係無いと思つ一方、何か緊張感に欠ける空間になるような気がしますが、やはり楽なほうが良いと言つのが結論です。



和やかに話しながら片付ける食欲が要求されます。

日本では会議の時に良く弁当が出来ますが、アメリカのランチパックはおおむね ハムがターキーのサンドイッチ（大きなフランスパンかこれも大きなクロワッサンに挟んである）そして必ずつくのがポテトチップスの袋と甘いクッキーのセットで、これに氷をたっぷり入れたコーラを飲むようになればあなたもアメリカのビジネスマン合格です。しかし大の男がいそいそと袋を開けてポテトチップスを食べてるのを見ると小さいときからなじんで居るのだとは思っていても吹き出してしまいます。もちろん私も食べますがコーラで昼を食べることは抵抗があり、水を飲むことにしています。

そしてなんと言ってもハンバーガーとフライドチキン、ポットドッグを避けてはアメリカの食生活は語れません。マクドナルドをはじめ沢山の店があり、会社の昼食時でも別にカウンターがあります。大きな催し

やちよとした昼食会などでも良く出ます。日本人が立ち食いそばを食べるセンスと違って、アイスホッケーの試合を見に行ったとき（連れて行ってもらったのですが）まずハンバーガーとビール、ポテトチップスがフライドポテト、又はポテトブーンを買ってから席について飲み食いしながら観戦します。（このときはおにぎりの感覚です）こんなものを食べてると彼らのように肥るのだと思ってもついいつい手が出てしまうのです。（おにぎりや弁当を売ってないので仕方ないと言う理由で）大都会では今や日本食は随分と普及してありますがこのあたりではこんな状況です。（ロッキーマウンツの名譽の為に付け加えますと、最近寿司が食べられる様になり、日本料理と言って中華料理との中間のようなものを食べさせる店も開店しました）

そして最後に「住」ですが、これは圧倒的な差があります。大都会はともかくここでは広い庭と大きな家そして良く手入れされた芝

生が標準で本当に優雅な住環境です。価格はこの辺の中古住宅なら15万ドル位で手に入るようです。この環境だけはとてかなわないと思ってしまうところですが、ちなみに私は単身のためアパート暮らしですがそれでも広い2LDKでこの辺では600〜800ドルくらいが相場のお手頃です。

そうはいっても貧富の差がありこれがアメリカの課題になってます。ご存知のようにアメリカと言う国は多国籍の人とが移住してきたアメリカ人の集団です。非合法でアメリカに入ってくるメキシコ人や、一方でIT等の業務でインドや中国の人達が沢山移民してきておりこの人種問題は21世紀も大きな問題になり、これをどうやって克服するかが大きな課題です。皆さんがイメージするアメリカ人はもしかするとまもなく少数派になり、代わってさまざまな国から来て、アメリカ人になった人達がこの国を運営する時がすぐそこに来てるような気がします。いまの課題は人種間の差別を取り除き、能力のある人や努力した人が正当に評価される社会をどうやって作るかだと思います。単民族の日本人にはとても理解できない問題を抱えて皆が努力しているのが良く分かります。

最後に、地理的にも経済的にも豊かなこの国は当分世界のリーダーを続けるであろうし、それが出来る社会構成であるとは思いますが、他の国の文化や伝統をもう少し分かってくれたら（単なる興味だけではなく）もっと素晴らしいと思います。住んでみたアメリカはなかなか良いところであったと言ったのが印象です。

カンザス大学での合唱交流演奏

64期（昭和37年卒）
林 高裕



勤務している平塚市とカンザスのローレンス市が姉妹都市として10周年をむかえた。その記念の文化事業として両市の合唱団が交流しカンザス大学の音楽堂にて演奏会を行った。私も団員兼通訳として参加し演奏した。カンザスはアメリカの南北戦争の口火をきつた所として知られている所だ。トウモロコシと小麦の一大産地である。美しい緑とミシシッピー川があり、落ち着いた街である。演奏会は2800名収容のホールが市長はじめ大学関係者等で満席となった。

私達は「八木節」「さくら」「おぼろ月夜」と「シェナンド」それからカンザスの州歌とも言おうべき「峠の我が家」等10数曲を歌い、宗教曲の「グロリア」をローレンス合唱団と共に8声で演奏した。スタンディングオベーションがあり感動的演奏会となった。カンザス

の新聞にも大きく賛辞の言葉が載った。合唱団の方のお宅にホームステイさせていただき、深い思いやりと心からの接待に感激した。将来は未長くカンザスとの文化交流を深め、共にすばらしい合唱団の交流が始まることをお互いに誓いつつ、短い滞在期間であったが、思い出深いアメリカの日々となった。

佐藤宣踐君と今は亡き、久美さんのこと

64期（昭和37年卒）
大越 陸夫

昭和四十九年（一九七四）五月五日。日本武道館。

全日本柔道選手権決勝の会場は大観衆に包まれ、私はその死力を尽くしての熱戦に魅入っていた。それ迄、佐藤は全日本出場八回、決勝進出三回目、栄冠にあと一步と迫りながら悲運に泣いていたのだ。格闘技では三十歳はベテラン、体力は既に限界に来ていたはずである。ましてや彼は最重量級ではない。しかし、二階席片隅で私は佐藤の優勝を確信していた。この三十歳の節目を迎え、それ迄常に優勝候補と言われつつ、為し得なかつた悲願の優勝に、死に物狂いの稽古をしたはずだ。この最後のチャンスを、彼は逃すはずはないと。まさに一進一退、死力を尽くしての十分間はまたたく間に過ぎ、その判定結果に場内は固唾を飲んだ。紅、二本。大観衆は一斉にどよめいた。努力と執念の男、佐藤の劇的な勝利の一瞬である。ついに宿願の天皇杯を手中に収めたのである。この稀に見る激しい勝負は、その後も日本柔道史の名勝負の一つに数えられることとなった。翌日の報道では「勝負は、ど



シドニーオリンピックの佐藤
総監督とメダリストたち

ちらともいえる際どいものであったが、佐藤の口頃の稽古に取り組むむむたむきな姿勢と、優勝に賭けるあの執念が、審判に佐藤の勝ちを認めさせたともいえる」とあった。

最後の一秒まで全ての力を出し切り、観客のみならず審判をも感動させたのだ。これぞ彼の真骨頂だと思った。

思えば、昭和三十四年函中に入学した彼は、あの薄暗く冷えびえとした旧体育館の片隅で、厳しい稽古に明け暮れていた。先輩のしごきに集団退部をしようとした仲間も、行動にもめげず、ひるまず、泰然として遠く未来に大志を抱いていた男であった。その姿は、十六歳にして既に求道者の面構えを持っていたのだ。当時の貧しい施設の中で、筋トレに体操部の木製平均台を担ぎ、一人夕闇迫る窓辺に向かい、もくもくと屈伸運動をしていたその凛々しい後ろ姿が懐かしい。三年時には主将佐藤、副将中里（函館在住、蔵谷司法書士事務所経営）をもって、念願の全国大会出場も果たしたのだ。野鳥のさえずりに着いた夕べに彩られた、

あの放課後の体育館の情景が、その瞬間、記憶の彼方から懐かしく蘇ってくるのであった（私は怠け者の卓球部員で旧体育館を柔道部と共有していただけなのだ）。佐藤の優勝は、唯、悲願を叶えたという以上の意義をもっていたと思うのだ。あの東京オリンピックの、ヘーシンクに完膚なきまでに

敗れた（今でも私は、神永昭夫ではなく、佐藤の恩師、天才肌の猪熊功をぶつけられ「柔能く剛を制す」結果となったと悔やむのであるが）日本柔道の神髄の復活に、くさびを打ち込んだ一瞬だったといっても過言ではない。この勝利で得た確信が、二〇三連勝の山下泰裕を生み、今、又新たな井上康生伝説の始まりを迎えることができたと思えるのだ。

しかし、人生は時に残酷で無常なものだ。去年十月二十一日、その彼を陰で支えてきた久美夫人が癌でこの世を去ってしまった。函中（バスケット部）から共に教育大（現、筑波大）に学び、結ばれ、二児にも恵まれ、理想の家庭を築いてきた久美夫人。高校生の山下を家に預かり、我が子同然に育ててきた「第二の母」であり、独身時代の山下をして「理想の女性は佐藤先生の奥さんのような人」との報道もあった。又、佐藤がシドニーオリンピック選手団の総監督として臨んだ昨年九月、亡き母に捧げた全試合一本勝ちの井上康生が、その母の遺影を掲げた表彰台

で、「この金メダルは、もう一人現在闘病中の僕の第二のお母さんに捧げたい」とのコメントが、マスコミに大きく取り扱われたのは記憶に新しい。二年前に母（五十歳）を亡くした井上にとつて、心の支えとなってくれた久美さんの手料理が何よりの楽しみだったという。シドニーに発つ時、既に「余命はあとわずか、オリンピック期間中に逝ってもおかしくはない」と、医者から宣告されていたのである。しかし、佐藤は二百七十余名の選手団の総監督という重責を担っていた。その心中は想像を絶するものであったろう。起き上がり、椅子に座って家で応援していたという久美さん。そのテレビに映し出された、表彰台中央の我が子同然の晴れやかな顔。万感の思いであつただろう。その後、病い

と闘うこと一カ月。終に、久美さんは帰らぬ人となつてしまった。葬儀は、平塚斎場でしめやかに終わった。大勢の参列者を前に、喪主としての挨拶があつた。「妻は、この六月、突然癌だと宣告された。それからわずか四カ月の命であつたが、決して弱音をはずさず、ひるむことなく、逃げずに癌と闘つてくれた。そして最期は、前のめりになつて倒れて逝つた」何と気丈で痛ましい死だつた。これが二人で貰ってきた生きる姿勢であつたのだ。

山下、井上伝説の生みの親である佐藤宣哉、温かな人間愛をもつてそれを支えた久美さん。人に静かな感動を与え、真の人間教育を自ら実践してきたこのドラマは、後世に長く語り継がれるだろう。

函中卒業から約四十年、街で偶然何度か出会い、一言三言葉交

佐藤久美さんを想う

67期（昭和40年卒）

稲越 淳子

昭和三十七年春、新体育館でスバスバスとシャウトしている彼女は、同学年と思えない、自分が目指す憧れの姿が其処にありました。その時は、一生親友として語り、楽しい家族ぐるみのお付き合いを過ごすようになるとは、



久美さんと

思いもかけませんでした。高校時代の三年間は、練習、試合、遠征等、苦しかったり楽しかったり、休みの日にも遊びに出かけたり、会わない日がなかつたと思います。彼女は大学でもバスケットボール部で活躍し、その試合の応援にも良く行きました。彼女は先輩の佐藤宣哉さんと結婚し、神奈川県平塚市に在住。私も静岡岡栗御殿場市に住む事になり偶然にも車でわずか一時間の所、お互い行ったり来たりは当然の現象でした。高校時代の学生気分そのまま過ぎてしまつた三十数年間、それが、突然彼女の身に、病魔が襲いかかりました。昨年四月末、右股関節に始まり、右脚から右肩へとその痛さが広がっているようで、私は早く病院で見てもらうように

わしただけの付き合いではあつたが、欠かさず観戦してきた全日本。武道館二階席で遠くから見ると佐藤の表情は、青雲の志を抱いていた頃の凛々しさ、あのチヨコとはにかむような微笑みに、昔日の面影を残して変わらぬ。その柔らかなにして剛直な感性をもつて貰った文武両道の機軸を守つてきたといえようか。函中のみならず、日本が誇れる真の偉大な教育者の姿である。

しかし、その彼を支え、多くの人に慕われた慈愛の人、久美さんは、今はもうこの世にいない。

奇しくも、昨年二月二十六日、函中黄金期を共に築いた副将、蔵谷正道（旧姓中里）の妻、紀子さん（六十四期、ハンドボール部）も、十年に及ぶ癌の闘病生活もむなく、鬼籍に入ってしまった。

勧めました。

六月二三日、最終検査の結果が出ました。肺癌の末期と診断された時は、既に骨まで転移していて、手術は不可能と言われたそうです。それから四カ月、ご家族はもちろんです。親戚、友人、他大勢の方々による心からの看病が始まりました。

久美ちゃん、毎日毎日皆の暖かい愛を、病院ではなく、ご自宅で受けました。彼女は、一生掛けても得られない、ご家族のそして友人の愛を全身に受け止め、病氣と戦いました。

しかし、十月二日、久美ちゃん、帰らぬ人となりました。久美ちゃん、貴女と共有した、思い出の日々を、私は決して忘れません。

合掌

第41期・玄冥会

松井亮太郎 記

第41期の首都圏に在住する同期生は28人あり、玄冥会と称して毎年5月と11月に会合をもっている。会場はJ R有楽町駅に近いニュートーキョーと固定している。

第41期は昭和14年卒業で、卒業してから62年経過した。同期生の年齢はおおむね80歳。悲しいことであるが鬼籍に入った友、体調不良の友が少しずつ増えて、会合に出席する人数が年とともに減少しているのは寂しいかぎりである。でも集まれば、すっかり昔の若者に戻り、話しがはずんで時間の経つのも忘れてしまうほど楽しいひと時を過ごすことができる。今年も5月23日の12時からニュートーキョーで、9人が出席して楽しく



過ごすことができた。その時の写真の前列右から、堀江実、守田哲郎、伊藤哲雄、松井亮太郎。後列右から、佐藤勲儀、穴戸修、津田玄雄、長戸毅、毛利啓次。

なお第41期は231人卒業した。少々古い数字で恐縮であるが卒業60年目の平成11年7月現在で、函館地区に25人、函館以外の北海道地区に23人、本州地区に37人、うち首都圏に28人が在住している。物故者は121人、消息不明者は25人であり、両方合計した146人は卒業者数の63%強となっている。参考まで。

第45期・翠楊会

田沼 修二 記

例年通り今年も6月23日(土)午後、NHK青山荘で翠楊会東京支部総会を開いた。出席者は18名、体調不良や旅行などによる欠席者は17名であった。今年に入って2月に中島恭一氏、6月に三輪勝利氏が逝去され、東京支部の集まりも年々淋しくなる。

会は故人の冥福を祈っての黙禱に続いて、出席者の健康を祝して乾杯。一年振りの再会で話が弾み、どうしても学生時代の思い出話が多くなる。一段落したところで近況報告に移ったが、仕事の話は殆どなく、本人や配偶者の体の故障や、最近取り組んでいる健康法や趣味の話が多かった。

会からの報告として、来年は同期生全員が喜寿を迎えるので、卒業60周年とあわせて盛大に「記念

総会」を開催したいとの提案があったが、函館・札幌・東京三支部の意見を調整して具体策を練ることとした。

会が終わっても話はつきず、全員が喫茶室に席を移してコーヒを飲みながら心ゆくまで語り合い、午後4時散会。

第49・50期 東京九十九会

伊東 克朗 記

昭和21年22年の卒業同期会は名づけて九十九会、東京の集まりは東京九十九会である。2年ぶりということもあって今年は4月11日に湯河原の老舗大滝ホテルに一泊した。登録メンバー48名のうち、首都圏以外からの参加4名を交えて20名が出席した。会は無礼講の歓談とあって、各人の近況報告だけで一次会は終わり。同じ場所での二次会に入る。会員差し入れの酒や身欠き饅頭などで通算4時間。もちろん話題は勤労動員を中心とした昔話。部屋に戻っても話は尽きなかった筈である。翌日朝食後次回を楽しみにしながらそれぞれ解散した。

この2年の間に数名の仲間を喪った。会える時に会っておこうという気持がみんなに強いことから毎月日を決めて都合の良い会員だけでも集まって昼飯を食おうということが決まった。

東京九十九会 定例昼食会
毎月第三木曜日
午前十一時半から
サンシャインビル 緑丘会館

第60期・ガッツ先生卒寿

山根 信子 記

2年前浜岡先生の米寿を祝う会を(3年7組卒業時担任)洞爺湖で行った件を報告し、卒寿のお祝いは地元函館でと約束し、早くも2年が過ぎ約束どおり函館在住の田村堅吾・七尾佳佑両氏のお骨折りにより函館ロイヤルホテルにて20名の参加者のもとに一同高校生にもどかしいひとときを過ぎました。

残念ながら出席出来なかつた方々の近況報告や新潟の所さんからの銘酒の差し入れや志田さんより先生に胡蝶蘭の御祝、又中国上海に中国語の勉強に行っている今野さんからも長いお便りを戴き、クラス全員の安否を気使っていらっしやる浜岡先生は卒寿にして今なお、まさにガッツ先生です。

二次会のカラオケも元気にうたわれ、翌日バスを借りての大沼ではモニターボードにも乗られ、函館山の頂上にも立たれ、お元気なお姿に又次回をお約束致しました。
6月16日(土)、17日(日)と最高の天気にも恵まれ、ふる里函館の良さを満喫した楽しいひとときでした。



第63期・午末の会

小林 嘉則 記

昭和36年卒業の63期は馬歳と羊歳生まれが主な同期生の為、午末(こみ)の会と称していますが、何も「三層」とき集まりではありませんが、遷厝を間近にして大変な時代を生き抜いている真只中です。

今年卒業40周年を迎え、記念すべき会を函館で開催しました。8月4日(土)午後2時母校正門前に集まり記念の植樹。今迄他の会ではやっていなくて、正門の横に二本、通用門の横に三本の八重桜を植える事が出来て記念撮影。校内を見学の後バスで会場の鹿部ロイヤルホテルまでの1時間は積もる話と郊外の変わり様、高速道路の一部開通等さわめきの中、あつという間に到着。受け付けて待機していた幹事と挨拶やら会費の徴集やらで大賑わい。夫々の部屋で落ち着く間もなくホテルの庭でパーベキューパーティーが始まった。

会を代表して渡辺親夫君の経過報告、初出席者のスリッチ、物故者への黙禱、暗くならない内に記念撮影とフル回転してやっと食事になる盛り沢山。

記念に作った校歌入りのCDはバックにふるさとのBGMとナレーションが語られ、タイトルには個々の名前入りという念の入れ方。配られた官製はがきの絵は同期の国井君の作で5枚のセットは函館限定販売オリジナル版。



暗くなると寒くなり、中には持参の冬のコートを着ている者もいたが、8時からパーに入ってカラオケタイム。10時からは畳に座って三次会。翌日のゴルフ組は早々に引き上げる者もいたが2時迄飲んでいて8時のスタートに遅れる者もいた。何よりも天候に恵まれ、爽やかな風、海と空の青さ、駒ヶ岳の懐かしい風貌に久し振りの青春時代を思い起こした40周年だった。

第65期・函中三八会

菅原 大作 記

函中三八会は、7月14日(土)、午後6時より、東京・文京区のこつらく季膳房で行われた。

今年の会場は、先輩(第56期)の若杉康孝氏を通じ、お店の定休日である土曜日に実施した。お店に無理をお願いした関係で、最低30人以上の参加を呼びかけた結果、総勢34人(男性23人、女性11人)が出席した。貸切りだったため、大変、あずましく、落ち着いた雰囲気の中で実施することができた。



今回は、遠方からの参加者として、岩手県盛岡市から蛸崎広司氏、宮城県仙台市の木村(旧姓・三浦)勝子さん、茨城県高萩市・田所(旧姓・坂口)子三子さん、つくば市・高野晃氏、千葉県館山市・小田切清彦氏、静岡県清水市・数内雅健氏がそれぞれ出席された。参加者には、欠席者から届いた近況報告と、最新の住所録を印刷して配布した。

今年は、午後6時にはほぼ全員が揃い、最も早くから参加された蛸崎氏の発声で乾杯、開宴したが、毎年参加している言わば常連組としては1年振りの再会だったものの、中には卒業以来38年経つてからようやく会うことができた人など多いで、暫くは長い年月の間隙を埋めようという情報交換が続いていた。

その後、初参加、あるいは久々という人に限って、近況報告を兼ねたあいさつをもらった。今年の会場は奥行きが深く、入口から一番奥の席までおよそ二十メートル近く離れていたため、マイクを使って話してもらったが、まるで高校時代の

ホームルームの時間そのままの賑やかさの中であいさつが行われた。この後、皆席を入れ換えて相互交流が盛んに行われたが、それぞれ恩師の思い出、授業中のエピソード、修学旅行や部活動、クラスメイトや遊び仲間のことなどのほか、仕事や家族のことなどを話し合っていた。午後8時30分過ぎ、記念撮影し、再会を約束して閉会となった。しかし、なおも別れがたくおよそ20人が二次会へ。二次会では、例年通りのカラオケショーが続いた。

第68期・よいよい会

木戸 正文 記

毎年6月の第二土曜日を、よいよい会を開催する日と決めている。今年には中野サンフラザにて開催した。出席は麻田(村本)民子、大河原(小澤)綾子、奥野知行、小野廣次、加藤伸幸、及能誠一、工藤(雨宮)昭江、児玉(中村)久美子、永田(斉藤)春子、村太(佐藤)朝子、白崎純一郎、相馬 亮、竹内 隆、淵沢泰明、細野ナツ、丸山 隆、山本晴義、吉野(米一)和子の皆さん。

初参加は加藤さん、次回は奥さんも一緒に出席をお願いした。今回都合で出席できなかった高橋弘明君からの差し入れの長野の銘酒「真澄」を飲みながらの懇談、近況報告が一次会で収まりきれず二次会のカラオケルームへ。車内暴力に巻き込まれ駅のホームから落ちたという相馬君の話、優秀な若者が多い中、世の中一体どうなっているやら。肺炎を患っている方、C型肝炎のいい薬が近々出るそうです。肝炎の検査を是非受けて下さい。陽性

であっても治る可能性が出て来ました。丸山重役からの耳より情報です。及能君のラジク夕好評とのことです。この会は全く違う世界の人の話の話を聞ける、来年も楽しみにしていくと細野さん。また村上さんから柔道の佐藤さんの妹さん(野生動物(狸等)にかわいいからといって餌を与える人がいるがこれは是非やめるべきである。人間が援助を与える事により彼ら自らの力で生きていけなくなる。動物保護にはならず逆の方向へ進む事になる。と獣医さんの立場で、奥野 帰山君が函館に居を移して東山に名曲喫茶を開くそうです。永田さんが病み上がりにもかわからず元気な顔を見せてくれました。

第69期・火ばしら会

梅田 やよい 記

また来年みんな元気で、楽しい話を楽しみに6月の第2土曜日に会うことで散会した。

火ばしら会東京支部の第15回同期会が、今年も例年にならい、7月の第一土曜日の7日、数寄屋橋の口チエスターで開催されました。今回は参加者が22名で、いつもより少なめでしたが、初参加の森山平三郎君と、2年振りに北海道から参加の安藤牧子さんを加えて、午後5時から10時までの延々5時間を「アツ」という間に感じさせる、賑わいのひとときでした。

森山君は、国内各地の勤務を重ねた後、韓国に2年半勤務して、今年帰国。京都に単身赴任されましたが、休日のUターン帰宅を機会に初参加を果たしました。

安藤さんは、昨夏ご主人が単身赴任されたため、上京の機会が増え、今回は同窓会の日程に合わせて、ご主人に会いに来ました。火ばしら会の面々は、毎年この時期顔を合わせて元気をもらい合っています。

元気をあげられる人、元気をもらいたい人、そしてそれを側で優しく見守ってくれる人、みんな、来年又会いましょう！

第71期だより

加納 元雄 記

71期は、新ミレニアムと共に50歳を迎えましたが、世紀末が近づくとつれて集まり出し、昨年10月に行った同期会では、40人近い人が出席しました。

卒業以来30年間ほとんど会うこともなかった仲間達が集まるため、自己紹介に多くの時間が取られるのが悩みの種です。でも、話をしているうちに昔の彼・彼女を思い出しく、たちまち気分だけは十代に戻るのが、同期会の不思議な魅力です。今や、年一回の総会だけではもの足らず、あちこちで小規模に寄り集まっております、仕事や近所の付き合いとは異なる、最も多感な時期の記憶を共有しながら利害関係のない付き合いを、皆楽しんでる様です。

今年、北は宮城県から南は福岡まで百人を超える名簿ができ、10月13日、ニュートキー本店の中華料理店で開催することになりました。今から、何人集まるか、最初は見知らぬ人と、「33年前の君か!」という体験を何人の人と出来るか、とても楽しみです。

第80期・同期会の想い出
宮北 正幸 記

私も80期は、4年に一度同期会を函館にて開いております。

つまり、4年に一度の夏のオリンピックの翌年の正月に向けて函館市内在住の幹事が揃い、毎回準備をしているわけです。



(平成12年9月以降)

細川 輝彦(28期・大15年卒)
平成11年11月27日亡くなりまし
た。(細川 純子)
成田 正二(31期・昭4年卒)
平成10年12月死亡。長い間あり
がとうございました。(奥様)
能登谷富雄(33期・昭6年卒)
夫は平成11年10月10日亡くなり
ました。白楊ヶ丘同窓会の益々の
御盛会をお祈り致しております。
(能登谷 律)
田熊国太郎(33期・昭6年卒)
高齢のため欠席をお願い致しま
す。いつも故郷の情報を沢山御提
供下され、遠い昔が偲ばれありが
たいことです。感謝
川村 勉(34期・昭7年卒)

今回は、1月2日に、函館花びし
ホテルにて、日本国内はもとより
遠くはアメリカより参加した方もお
り、総勢45名の同期生と、恩師4人
を囲んでの同期会となりました。
対馬良光先生(数学)・菊谷栄一先
生(政経)・加藤正之先生(物理)・柴田
隆一先生(数学)にご出席いただき、
中でも対馬先生は、ご高齢で体調

川村勉 平成10年2月5日に
故人となりました。

会の益々の御発展をお祈り申し上
げます。(川村 由野)
木原 芳男(34期・昭7年卒)
最近脚が悪く歩行困難のため欠
席させて頂きます。御盛会を祈り
ます。

片山 球(35期・昭8年卒)
残念ながら本人(球)は、平成
11年1月3日になくなりました。
(片山 悦子)

岡崎 弘(35期・昭8年卒)
御案内をいただきありがとうございます
ございました。気力はまだあるのだ
ですが、足がめっきり弱く、外出も
余り出来ない状況です。貴会のご
盛況と諸賢のご健勝をお祈りいた
します。

佐々木孝充(35期・昭8年卒)
去年帯状疱疹で入院、未だ後遺
症あり。不調に付、出席は見合わ
せませす。祈る盛会を。

清水 博(35期・昭8年卒)
平成12年2月23日死亡いたしま
した。長い間お世話になりました。
とうございました。(清水ケサノ)
新田 義圓(35期・昭8年卒)
父、新田義圓は平成10年12月6
日天寿を全う致しました。おくれ

が優れない中、自分は今後そう何度
も、同期会へ参加できないかもし
れない。」と言われ、私も幹事も
ハラハラしながら、無事一次会終
了まで出席していただきました。
やはり恩師に出席していただい
たことにより高校時代の想い出話
に花が咲き、二次会へもほとんど
の方が参加されました。

ばせ乍ら生前の皆様方の御厚情を
深謝いたしますと共に、会の益々
の御発展を御祈念申し上げます。
(新田 一郎)

濱田 榛名(35期・昭8年卒)
足が弱って殆ど外出出来ません。
森本 良平(36期・昭9年卒)
健康多忙、御無沙汰御寛容之。
三國 榮徳(36期・昭9年卒)
老兵は消え去るのみ。近來政・
官・財の不祥事、少年犯罪の多発
マスコミは日本沈没などと書く。

白楊健児諸君、日本再建に頑張っ
て下さい。老人の切なる願いです。
柿本 大吾(38期・昭11年卒)
最近鹿兒島北海道人会に出席し
てみた。函館出身者も何人が居り
ますが、函中を卒業しているか否
かは不明。母校の発展を祈る。

今井 清(40期・昭13年卒)
東京白楊だより第23号懐かしく
拝見しました。二上東京支部長ご
退任の由、大変ご苦勞様でした。
御兄の二上清様は函中剣道部で私
の2年先輩であられました。

須永 静清(40期・昭13年卒)
お世話様です。今年も8月28日
から9月9日、諏訪中央病院で信
州風景の作品をならべ個展をやっ
てもらいました。11月まで八ヶ岳

今回の同期会の催しの中で、最
新の函館中部高校のビデオアルビ
デオを上映したのですが、私も
が在学した当時と比べて非常に各
施設(新校舎)が立派なことに驚
くばかりです。

山麓で製作しています。
富田 朝彦(40期・昭13年卒)

この新年に胃摘出手術を行い、
後遺状況に留意した日々を送って
おり、残念ですが欠席。
佐々木忠郎(41期・昭14年卒)
歌誌「新アララギ」(会員三千
名)の選者、編集委員として後進
の指導育成に励んでおります。同
窓会の発展充実を祈念してやみま
せん。

上杉 寿彦(42期・昭15年卒)
6月、7月と体調をくずし入院
生活、目下リハビリ中。
井筒 吉彦(43期・昭16年卒)
いつもお世話になっており、あ
りがとうございます。10月27日の
大会は、予定していた旅行と重な
り、残念ながら欠席させて頂いただ
きます。悪しからず。

神山 茂郎(43期・昭16年卒)
香港に住んで居る為、10/27は
申し訳ありませんが欠席です。
小山 俊介(43期・昭16年卒)
Email: synsuke@dot.or.jp

佐藤 忠男(43期・昭16年卒)
東京には同窓の方が多くと思ひ
ますが、当古屋は余りなく寂し
いです。来年は是非出席したいと
思っています。

互いに見ることのできる再会は、
いくら時間が有っても足りないも
のです。
我々同期のメンバーもそれぞれ
の社会で活躍しているわけですが、
4年後の再会を楽しみに、より多
くの方々に出席していただけるよ
う、私も幹事一同次回の同期会
へ向け頑張るつもりであります。

森松 高司(43期・昭16年卒)
昨年10月の会合に神山君が出席
するのなら私も無理してでも出席
したかった。彼は香港で頑張っ
ているのだろうか。

池田 知行(47期・昭20年卒)
昨年宮城支部長交替しました。
創立15年の宮城支部の発展に努め
ます。応援願います。
菊池 昶史(52期・昭25年卒)
「たより」ありがとうございます。

渡辺 昭満(54期・昭27年卒)
明子さん、頑張っておられるん
ですね。ホームページ見えます。
充実を期待して居ります。皆様に
よろしく。

高木 幸子(55期・昭28年卒)
東京白楊だより今回も懐かしく、
一気に読ませて頂きました。
澤田 経子(56期・昭29年卒)
中部高ではテニスのラケットを
振り回してばかり、勉強はサツパ
リでしたので、只今市民力レッジ
3年生で楽しく学ぶ新しい友達
の輪を広げています。

寺田 姉生(57期・昭30年卒)
いつも連絡ありがとうございます。
中島 陽子(57期・昭30年卒)

役員の方々にはいつもお世話様になりましてほんとうにありがとうございます。

堀江 郁子(57期・昭30年卒)

野村実氏の早すぎた他界は残念でなりません。23回同窓会ではあまりにやせて顔色が悪かったの、安藤牧子氏の絵葉書で元気を送ったつもりでしたけどかないませんでした。御冥福を祈ります。

吉田 精吾(57期・昭30年卒)

肉体的な老化現象は避けられませんが、精神的にはいつまでも若さを保ちたいと色々チャレンジしています。同期・同窓の皆さんと顔を合わせるのも若さを保つ上で大いにプラスになります。

和田 勝代(57期・昭30年卒)

幹事ご苦労様、よろしく願っています。

藤田 泰正(57期・昭30年卒)

いつも読みやすく中身の濃い「東京白楊だより」ありがとございます。支部大会出席出来ませんがいつまでも盛会である事を祈っています。

渡部 顕(57期・昭30年卒)

野村君の突然の訃報には本当に驚きました。彼には、公私共に大変お世話になりました。ご霊前に経を手向けたく、数度御宅に時間を変えて電話すれどおらず、心残りです。皆様にもよろしく。合掌。

山本 哲也(58期・昭31年卒)

役員幹事御一同様ご苦労様です。今後共よろしく願っています。

坪田 憲俊(58期・昭31年卒)

大阪勤務中。

芦刈 宏之(59期・昭32年卒)

いつもお世話様です。今回は是非同窓会に参加させていただきた

いと思っております。

飯田美津子(59期・昭32年卒)

いつもお知らせありがとうございます。

伊藤 征子(59期・昭32年卒)

いつもお世話様です。前回に続き今回も女性講師による講演会、興味もあり参加致しました。1日3回1分間の人間かかし、簡単なようでなかなか続かないものですね。

古川 セツ(59期・昭32年卒)

もう少しお安くありませんか。

伊藤 紀子(60期・昭33年卒)

東京白楊だよりを毎号楽しく拝見しております。今回は恩師の若々しいお写真が懐かし、久しぶりに十代の頃を思い返しました。

岩崎 栄子(60期・昭33年卒)

市内の演奏会でフルートの伴奏や連弾(自分の子供と)及び歌(ソロ・合唱)をして楽しんでます。仕事も少しやっています。

板澤 森一(60期・昭33年卒)

昨年定年退職と共に、長い単身赴任も終了、日立市での自宅での生活も一年以上になります。効率とか成果という文字を忘れ、読書、旅行、ガーデニング等々マイペースの生活を楽しんでます。

生田 喬(62期・昭35年卒)

平成13年3月19日に上海より帰任しました。3月20日付けで日立空調システム㈱を退職しました。来年七飯町に帰る予定です。

宮島 睦美(62期・昭35年卒)

いつもお知らせを送り下さりありがとうございます。又、お会い出来るのを楽しみにしています。

角田 捷雄(63期・昭36年卒)

平成12年10月10日付で仙台から

福岡へ転動しました。

佐藤 建(63期・昭36年卒)

9月より縁あって㈱ニチコにて商品開発の仕事を手伝うことになりました。その他フードコンサルタントとして、他の仕事にも精を出しております。

山崎 悦功(63期・昭36年卒)

欠席ばかりですが、ご連絡は保ちたいと思います。

加賀 幸彦(67期・昭40年卒)

卒業35周年、10月7、9日札幌で記念の「志丸会」を行います。

松田 幹夫(67期・昭40年卒)

志丸会は函中百周年の時には湯ノ川で同期会を催し75名集まり、この時5年毎に集まると約束をし、平成12年は札幌に集まることになりました。全国から65名も集まり、10月7日から2泊3日青春時代にタイムスリップです。次に集まるのは遠慮か? 年を取ると共に楽しまなくてはと思っております。

三門 博子(67期・昭40年卒)

Email: mikado@y22.so-net.ne.jp

重松 健一(68期・昭41年卒)

同窓会の際の写真等がありまして、会報等で見せて下さい。なつかしい顔を見るのが楽しみです。

細野 ナツ(68期・昭41年卒)

東京白楊だより楽しく読んでおります。係の方いろいろ大変でしょうが、これからも頑張ってください。よろしくお願いします。

斉藤 裕子(69期・昭42年卒)

今年是非参加致したいと思っております。久しぶりに諸先輩達との会話を楽しみにしております。

園 蘭美(69期・昭42年卒)

白楊だより同期の牧子さんの

講演記録が掲載されていて感激。講演を聞きたいと思っております。

たので、とてもうれしいです。いつも充実した豊富な内容で楽しく拝読させていただいております。

花巻 省三(69期・昭42年卒)

同郷の先輩諸氏との旧交を温める機会が楽しみです。

板垣 裕則(70期・昭43年卒)

無事息災。

川村 哲雄(71期・昭44年卒)

第71期同窓会を10月7日(土)に三菱重工業㈱代々木会館で、総勢37名の参加を得て、午後5時から開催しました。大部分の人が二次会にも付き合っており、延々5時間余の大宴会となりました。

谷口 雅典(72期・昭45年卒)

当方50歳の節目を迎えます。来世紀も皆様のご健勝(闘)を祈念致します。

龍崎 千暹(74期・昭47年卒)

同期の皆様はたぶん今年、卒年次と年齢が一緒ですね。私はちょっと回り道をしたもので、年齢的には2期上です。一足お先に人生50周年を迎えます。記念に北方領土の択捉をのぞいて来ようかと計画。父の生まれた故郷です。

佐藤 あや子(75期・昭48年卒)

幹事のお仕事ご苦労様です。お身体を大切になさってください。

中沢 満(76期・昭49年卒)

皆さんの活躍に励まされています。

今任 美也子(80期・昭63年卒)

いつもお知らせありがとうございます。日本酒味わいクラフ、というホームページを立ち上げました。同時にメーリングリストも運営しております。

http://sake.to/club.mikori/

松本 由美(81期・昭54年卒)

ご連絡ありがとうございます。

清水 真(82期・昭55年卒)

今年東亜大学助教に就任して下関に転居しましたが、都内の大学の非常勤講師も兼務しておりますので、毎週東京、下関を往復する生活をしております。

松 健二郎(83期・昭56年卒)

現在印刷会社にて新任の管理職として働いております。払込今回初めてです。申し訳ありません。

佐々木正城(86期・昭59年卒)

私の実家は母校から徒歩3分、同じ時任町内にあることもあり、帰省するたびに思うのですが、附近にすいぶん空地が増えました。一種のドーナツ化現象なのでしょうが、住む人が少なくなり、だんだん寂しくなってきたり残念です。何か打つ手はないものかなと思っております。

平井 文三(86期・昭59年卒)

函中にも同窓会東京支部にもインターネットでアクセスできるようになりました。特に函中パソコン部の掲示板は現役にOBが進路選択等についてのアドバイスをできるおそらく唯一の場であると思われれますので、大いに活用しましょう。



二上前支部長の「函館市栄誉賞」受賞祝賀会

3月3日青山ダイヤモンドホールに於て、「二上達也さん 函館市栄誉賞受賞をお祝する会」が、約三百人が参集して開催された。

二上氏の同期（玄羊会）が呼びかけ、白楊ヶ丘同窓会、東京青柳会、北海道道南会、函館市東京事務所、日本将棋連盟、東高・西高同窓会等が賛同、発起人となって実現したものの。

セレモニーでは、将棋の原田九段、内田中部高校長、山内同窓会長、早坂茂三氏、羽生五冠等が相次いで祝辞を述べ、祝宴では馬簾太鼓、津軽三味線、マジックショーで景気をつけ、玄羊会の吉川師範の詩吟「勸学」からカラオケ大会に移って喉自慢が次々と登場、64期徳田定勝氏が負けじと美声を披露、遂には受賞者もデュエットで二曲も歌って大いに盛り上がった。

最後は69期米木かをり氏のピアノ、63期土橋道子・64期佐古則興両氏のリードによる唱歌「ふるさと」大合唱で、3時間に及んだ大祝賀会はお開きとなった。

札幌支部総会および懇親会に出席して

札幌支部第21回定期総会および懇親会は平成13年6月22日札幌グランドホテルで約80名が参集して開催された。午後6時から高島支部長が議長となった総会が滞りなく終わり、53期の作田和幸氏の「人生PKといきたいもんだ」と題して講演があった。人生びんびん生きてころりと死にたいという意味だそう、あちこちから笑いが起こった。誰しも願うことである。講演のあと32期の松本氏の乾杯の発声で懇親会に移った。久しぶりで会った同窓生達の楽しい会話がはずんだひとときであった。校歌のあと大先輩達が壇上で同窓会歌を斉唱して散会した。

杉田 博子（54期）



4月29日、本年度の春の叙勲が発表され、51期どんじり会東京支部（あすまし会）の次の二氏が受勲の栄に浴びました。

勲二等瑞宝章

岡田 潤（元名古屋地方裁判所長）

勲三等旭日中綬章

柴田 啓次（元国土庁地方振興局長）

「ポプラ会」報告

白楊ヶ丘同窓会東京支部のゴルフ愛好者によるコンペ「ポプラ会」は、今年で開始以来八年を経過した。本年度も11月と5月の2回開催された。

第15回は、平成12年11月21日、第12回コンペから連続開催している埼玉県の浦和ゴルフ倶楽部で、23人が参加して行われた。前日までは台風並みの暴風雨と雷でプレーの実施が危惧されたが、当日は多少足元が悪かったものの、微風、快晴の絶好のコンディションで行われた。成績は、金子公彦氏（第61期）が初優勝。ベスコロは、札幌から参加された第64期の河原木義治・和子ご夫妻が、義治氏が42、和子さんが47、53でそれぞれ獲得された。第16回は、平成13年5月11日、

前回と同じ浦和ゴルフ倶楽部で26人が参加して行われた。スタート当初は、晴天、微風。昼食後に雷雨による中断などもあったものの、蒸し暑さもなく、快適な天候の下、プレーが行われた。

成績は、函館から参加された坊吉太郎氏（第54期）が、39、38でベスコロを獲得するとともに初優勝した。なおポプラ会コンペでは、毎回の優勝者に、プロ棋士が対戦中に使用する扇子に二上前支部長ご自身が揮毫して「二上賞」として進呈されているが、この扇子が第15回の金子氏、第16回の坊氏に、それぞれ贈られた。なお、次回（第17回）のポプラ会コンペは、11月9日（金）の8時6分スタートで開催を予定しています。案内状をご希望の方は、FAXで、住所、氏名、卒業期を下記までご連絡下さい。

「函館巴会」報告

白楊ヶ丘同窓会のゴルフコンペ・ポプラ会とは別に、平成9年より、函館西高校と東高校の関東地区の同窓会支部とゴルフを通じて相互交流を図ることを目的としたコンペ「函館巴会」が開催されているが、第5回コンペが、平成13年4月19日に千葉県の鷹の台カントリー倶楽部で西校13人、東校12人、中部12人の計37人が参加して行われた。成績は、個人では西校の森英爾氏が、団体は西校が優勝した。中部は、函館から参加された鈴木尊子さん（第57期）が2位に入賞したほか、団体では準優勝だった。

ポプラ会申込み先
FAX: 03 3424 6854
63期・小林嘉則 宛

評議員会報告

平成13年度の評議員会が4月27日、34名の出席で開かれた。

平成12年度事業及び収支決算の報告と監査報告に続き、13年度の事業計画案・予算案の説明があり、承認された。続いて第25回親睦大会と、理事及び評議員等の人事について説明があった。

その後、「組織強化」に関するの話題が中心となり、「なぜ会費納入者や大会出席者が少ないのか?」「講演会の講師は、卒業生にこだわらず、知名度の高い人を頼んだら、参加者が増えるのでは?」などの意見が出された。そこで、数年来休止状態の「三二評議会」を開催してはどうか?との提案があり、評議員の見直しを積極的に働きかけ、協力を呼びかけるための一番の有効な手段かと思われたので、即実行に移すこととなった。

6月28日、杉田支部長をはじめ、今回は大会担当の理事や副支部長を加え、70期代、80期代の評議員を中心に、18名の「三二評議会」が開かれた。この日出席できた新評議員は5名だったが、

平成12年度東京支部会計決算書

収入の部	
前年度繰越金	¥6,923,708
総会費(143名)減	¥1,144,000
年会費(831名)増	¥2,493,000
利息収入	¥95,764
雑収入	¥70,000
計	¥10,726,472
支出の部	
総会関連費	¥1,399,980
会報関連費	¥947,916
事務費	¥602,723
会議費	¥155,731
その他	¥665,290
次年度繰越	¥6,954,832
計	¥10,726,472

梅田やよい(69期)記

第25回親睦大会

2001年10月27日(土) 午後5時～

講演：「函館の歴史に息づく生命、新世紀へのメッセージ」

講演会 午後5時～6時 懇親会 午後6時～

講演者プロフィール



佐渡谷 安津雄(さどや あつお)
画家

昭和18年5月29日 函館生れノ
函館中部高校 昭和37年卒(64期)
高2まで体操部に所属、高3に
白楊画会に入部、油彩画を始める。
北海道学芸大学函館分校中退。

1967年より家業(画材額縁
店)文雅堂に従事。美術教室、画
廊を開設、美術の普及をはかる。
専門分野の研究にも早くから取り
組み、1985年、日本人初参加
イタリアでの「国際額装コンペテ
イション」で「グランプリ」、「ワ
ールドマスター」称号授与。19
92年(株)文雅堂社長辞任。

1990年に中断していた創作活
動再開。1994年より帯広、函館、
札幌、仙台、東京等で個展開催。
作品のモチーフは五稜郭、港、
元町等の函館風景、交流で訪れた
フランスの地方都市風景等。

函中時代少年の眼で見、少女の
心でとらえ人の営みのなかにだけ

もが携えてきた故郷の風景、函館、
その中に潜む 確かな生命。函館
の歴史をたどりながら皆様と一緒
に探ってみたいと思います。

画材店経営のかたわら、函館市
民の多様な文化活動と積極的に関
わりをもつ。市民創作「函館野外
劇」には創設期より参加。

国際交流を通じた 文化活動の
可能性にも着目、フランスや中国
との文化交流に参加。

現在、函館日仏協会副会長(94
02会長)。函館日中文化交流をす
める会会長。函館中国健康気功
研究会代表(気功教室主催)

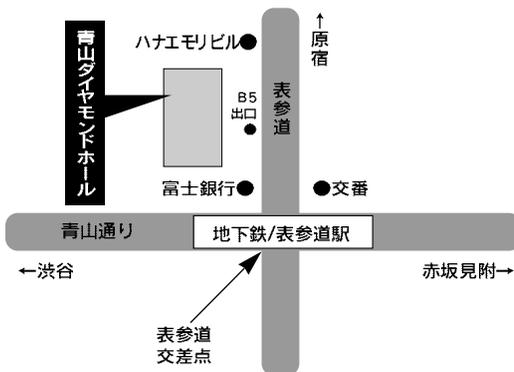
趣味として、自家焙煎の「トビ」を
楽しむ会、王様乃珈琲倶楽部」主催。

ご案内

「佐渡谷安津雄・油彩画展」

2001年
9月22日(土)～29日(土)
ギャラリー・カンディード
東京・銀座 4 13 15
電話 03 3524 8591

青山ダイヤモンドホール ご案内



◆青山ダイヤモンドホール◆

〒107-0061 東京都港区北青山3-6-8
電話：03-5467-2111

- 地下鉄/銀座線・半蔵門線・千代田線表参道駅B5出口直結
- JR山手線/原宿駅下車・徒歩10分
- ※駐車場(有料)には限りがございますので、なるべく公共の交通機関をご利用下さい。

函館情報

：函館市東京事務所：

当事務所は、赤坂プリンスホテル旧館に面したプリンス通り沿いに位置しており、麹町会館の真向かいのビルの2階にあります。

今年から職員1名減の3名体制となりましたが、従来どおり中央省庁や関係団体との連絡調整・企業誘致活動・Uターン相談・観光宣伝等の業務を行っています。

お近くにお出かけの際は、懐かしい函館弁が飛び交っている当事務所に是非お立ち寄りください。お待ちしております。

所長 古川 雅章

東京都千代田区紀尾井町3 29

紀尾井町山本第2ビル2階

電話：03 3261 0072

FAX：03 3261 0339

：函館市の近況：

JR函館駅の新駅舎建設に着手

(平成15年12月完成予定)

新駅舎は木下川撤去跡地に建設するための約40m海側に移動します。駅舎は2階建て、延べ床面積6,100㎡で駅舎中央に高さ25mの卵形の塔を配置するなど近代的なデザインとなっており、2階部分は土産店・飲食店などの商業施設を設ける予定です。

(仮称)総合保健センターの建設に着手(平成15年4月オープン予定) 赤ちゃんからお年寄りまでの全ライフステージを通じた健康づくりの場としての保健センターを整備します。センターは4階建て、延べ床面積7,987㎡で、旧渡島支庁裏手の市営住宅跡地に建設され、保健所・衛生試験所・(仮称)保健センター・(仮称)道南歯科保健センターの各施設が入居します。

市営バスが函館バスに経営移管 平成13年4月から3年間の計画で市営バス路線が段階的に函館バスに経営移管されます。

東京白楊だより 24号

- 発行 白楊ヶ丘同窓会東京支部
- 発行人 杉田 博子(54期)
- 編集責任 小林 嘉則(63期)
- 発行日 平成13年9月1日

【東京事務所】

〒160-0022
東京都新宿区新宿
1-13-8-302
TEL：03-3335-6281
FAX：03-3341-5048